

---

# 緋弾のエリア～神殺し伝説～

珍獣

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

緋弾のアリア〜神殺し伝説〜

### 【Nコード】

N1430Y

### 【作者名】

珍獣

### 【あらすじ】

世界でもトップクラスの特特殊部隊、米軍・第1特殊部隊デルタ作戦分遣隊、通称デルタフォースに14歳で入隊した米軍少佐の毒島ぶすしま金助きんすけ。

そんな金助は、更に諜報を得意とするSランクの凄腕武偵でもあった。

軍の上司でもある父に勧められて4月から従兄の住む日本の武偵高に転校することになった金助。

だが、日本で出会った仮面を付けた謎の男に渡された刀『神殺し』

を手にしたことで、色金を巡る争いに巻き込まれていく……!!

## プロローグ〈再会〉（前書き）

先に言っておきますが、私には文才というものはありません!!  
ひどいことになってるかもしれないませんが、温かい目で読んでいた  
だけたら幸いです。

## プロローグ〜再会〜

武偵。それは日々凶悪化する犯罪に対抗するために作られた国家資格で、武装探偵の略称である。

武偵は武装を許可されて、武偵法の許す範囲内においてありとあらゆる仕事を請け負う、いわゆる便利屋である。

レインボーブリッジ南方に浮かぶ南北およそ2キロメートル・東西500メートルの人工浮島、通称学園島。

元は空港滑走路として使われる予定だったこの島に、武偵の教育機関である東京武偵高は存在する。

その武偵高の施設の周りを俺は歩いていた。

若干短めの黒髪に、それなりに整った顔立ち、185センチの長身、武偵高の制服を着ている。

俺―毒島ぶいすじま 金助きんすけは、教務科マスターズで転校の最終手続きを終え、敷地内を散歩していた。

自慢だが、俺は米陸軍特殊部隊のデルタフォースの最年少隊員であり、階級は少佐だ。

なぜそんな俺が東京武偵高にいるのかというと、父親であり、尚且つデルタフォースの司令官である毒島ぶいすじま 金正かねただに「日本の優秀な武偵の中で、自分を磨くように」という指示を受けたのと、従兄がこの学校にいるからだ。

俺は周りの施設を見回した。

『アメリカの基地程では無いが、なかなかの施設が揃ってるな。』

俺は更に歩を進め、気がつけば第2グラウンドの横に来ていた。

『ここがグラウンドか。広さはまあまあかな？』

そう言いながら歩きながらグラウンドの広さを確認していると、グラウンドの入口からかなりのスピードで何かが入っていくのが見え  
た。

『自転車・・・なんであんなに速度だしてるんだ？駐輪場はあつち  
じゃなかったはずだし・・・』

自転車の行き先を考えていると、後ろから少女がパラグライダーで  
低空飛行しながら追いかけて行った。

『・・・新手の鬼ごっこかな？』

そう呑気な事を考えていたらパラグライダーの少女が自転車の先に  
回り込み、掴まるところに足を引っ掛けて逆さづりになり、自転車  
に乗った奴にぶつかって自転車に乗っていた奴はパラグライダーの  
少女に抱きつく形で自転車から持ち上げられた。

その直後、乗り主をなくした自転車は徐々に速度を落としてー爆  
発した。

パラグライダーと自転車の二人は、今の爆風で体育倉庫の中に転  
がって行った。

『マジかよ・・・!!』

訓練で何度も使用したから分かるが、爆発の音・威力・爆発の仕方  
等の情報から察するに今の爆発はC4爆弾が使われていたというこ  
とが俺には分かった。

しかも、自動車くらいなら余裕で吹き飛ばせるほどの量を。

『とにかく体育倉庫に向うか』  
ひとつ飛びでフェンスを乗り越えて、体育倉庫に向かって走り出  
した。

だが、それは背後からの銃撃に止められた。

弾が跳んできた方を見ると、そこにはスピーカーとイスラエルのI  
MI社の傑作銃のUZIが取り付けられた、セグウェイが10台止  
まっていた。

『なんでセグウェイなんかUZIが付いてるんだよ!!』  
俺は近くの太い木の陰に隠れた。

セグウェイは、3台だけ残して残りの7台は体育倉庫の方に向かって行った。

『一体どうなってやがるんだよ……!!』

キレ気味の声でそう言いながら、右脇のショルダーホルスターからベレッタを抜いた。

セグウェイとの距離は、およそ8m。

『喰らえ!』

少しだけ木陰から身を出して、セグウェイに向かって残弾が無くなるまで発砲した。

あまり良い射撃体勢ではなかったが、綺麗に全弾命中し、2台は壊れていた。

『一つ残ったか……』

ベレッタのマガジンを代えて、俺はまた木から身を出して最後のセグウェイに数発発砲した。

撃った弾の内一発がUZIに当たり、セグウェイは行動不能になった。

『無駄に手間掛けさせやがって……』

セグウェイの破壊を確認し、直ぐに体育倉庫に向かった。ちょうどその時、体育倉庫の方から少年が一人出てきた。

『なっ……!!』

その少年の顔を見て、俺は目を丸くしたまま固まった。

その少年のことを、俺は知っていた。

『キンジ……』

その少年――遠山 キンジ（とおやま きんじ）は、俺の従兄だからだ

## ブローグ〜再会〜（後書き）

中途半端な終わり方をしてしまいましたw w  
とりあえず次はもう少ししっかり書きたいと思います。



第1話〜遠山キンジと神埼・H・アリア〜（前書き）

1日1話ペースで書くつもりでしたが、予想以上にキツイです

## 第1話〜遠山キンジと神埼・H・アリア〜

それなりに離れていたもので、キンジは俺に気づくこともなく去っていった。

『って事は自転車に乗ってたのはキンジだったのか……。だが何故パラグライダーの子に追われてたんだ？』

追いかけてようか考えたが、そこであることを思い出した

『そうだ！さっきのセグウェイ！！』

俺は今さっきキンジが出てきた体育倉庫へと走った。

この時に体育倉庫に行ってしまったことを、後に後悔することになるとは知らずに。

体育倉庫のすぐ近くまで来た俺は、言葉を失った。

体育倉庫の前には、セグウェイに取り付けられていたUZIが大破——恐らく銃口に弾丸を入れて壊した——していた。

『これは……キンジがやったのか……？それとも……あいつか？』

「アイツ！今度会ったら絶対風穴開けてやる……！！」

俺の目線の先には、小太刀を振り回しながらワッキャー叫んでいる少女がいた。

小学生くらいの身長に、武偵高のセーラー服を着ている。

特徴的なのは、膝のあたりまである長いピンクのツインテールだ。しかし……。

『何というアニメ声！……って今はそんなこと言ってる場合じゃねえな。』

エクスキュー……じゃなくてすみません』

英語を話しそうになりながらも、転校初日から悪い印象を持たれまいと丁寧な少女に声をかけた。

「ひゃうつ!!」

いきなり話しかけられてびっくりしたのか、少女はバツと振り返って俺を見た。

「驚かせちゃった？それはスイマセン。ところでいきなりだけど、見いつけた!!」・・・へ?」

話している途中でいきなり指を指されて、俺は間の抜けた声を出した。

「さつきはよくもやってくれたわねこの強狼男!!」

少女は独特な地団駄を踏みながら怒鳴りつけてくる。

「強狼?何のことですか?」

「とぼけてるんじゃないわよ!!」

少女はそう言うと、物凄いスピードで小太刀で斬りかかってきた。

「ぬおっ!!」

全力で横に跳んで、ギリギリで小太刀をかわす。

「ええいちよこまかと!!」

少女は直ぐに方向転換して、再度俺に斬りかかってきた。

流石に連続でよけるのは無理だと判断し、ショルダーホルスターに銃と一緒に付けてあるコンバットナイフを2本取り出し、切り結ぶ勢いは少女の方が上だが、頭に血が上っていて力にムラがあったため腕力だけで押し切ることができた。

もはやこの様子では事情を聞くのは不可能に等しい。

俺はこっそり隠し持っていたスタングレネードーちなみにこれは閃光だけのタイプだーを後ろ手で準備する。

『てことで三十六計逃げるに如かず!!』

少女と俺との間にスタングレネードを投げて、全速力で後ろを向いて走り出した。

少女は、投げられたものがスタングレネードだと直ぐに理解し、腕で目を隠していた。

スタングレネードが爆発し、辺りは一瞬光に包まれた。

俺は少女が動き出す前になんとかその場を離脱し、俺は教務科マスターズに向

かった。

『まさかいきなり襲われるとはな・・・しかも強猿男とか言われたし・・・』

俺は教務科で先生に指示された教室（ちなみに2・Aである）の前で、中で軽く挨拶をしている担任の高天原ゆとり先生を待っていた。

『わざわざ外で一旦待たせてから呼ばなくても、最初っから中に入れてくれればいいのにな』

そんな感じで愚痴つてると、教室の中からこんな声が聞こえてきた。「私からの挨拶が終わったところで、スペシャルゲストの転入生を紹介しまーす

ニューヨーク武偵高から来た、カッコイイ帰国子女ですよー」

先生、なんで紹介する前からそんなにハードルあげるんですか・・・そんな俺の心の声もつゆ知らず、先生が「それでは入ってきてください」と呼んできた。

まあそれはそれとして置いて、やはり第一印象は大事だ。キツイ顔になっていないか確認し、俺は教室の扉を開いて中に入った。

瞬間、教室中の女子生徒は「キャー!!!」という悲鳴なのか何なのかよく分からない声を上げた。

良く知り合いに「顔立ちがいい」とか「イケメン」とか言われるが、こんな悲鳴を上げられるほどのものだったとは思わなかったな。

教壇のところまで行き、先生に軽く頭を下げてからチヨークを手に取り、黒板に漢字で名前を書いてーちなみに字はかなり綺麗ー皆の方に向き直った。

クラスの皆をざっと見渡すと、そこにはキンジの姿があった。

『先生の紹介にあつたとおり、ニューヨーク武偵高から来た毒島金助です。よろしくおねがいます』

丁寧に自己紹介をし、最後に軽い営業スマイル(?)をした。するとまた女子生徒達が「キャー!!!」と声を上げた。

若干引き気味の先生に促されて、キンジの真後ろの空席に座った。

「凄い人気だな、お前。俺は遠山キンジだ。」

座るなり、後ろを向いてキンジが話しかけてきた。

「どうやら俺のことを忘れたらしい。」

俺は、キンジの顔を笑顔でジッと見つめる。

「どうした？顔になんか付いてたか？」

キンジは両手で顔を探った。

もちろん何も付いていない。

「何だ、忘れられちゃまってたか？」

「忘れる？何のことだ？」

「本当に覚えてないのか・・・まあしょうがないか。最後に会ったのだから5歳くらいだったもんな・・・」

「お前は何を言ってるんだ？」

少し感傷にひたっていた俺に、キンジはさっきとほとんど意味が変わらない質問を投げつけてきた。

「俺だよ俺。従兄の金助だよ」

「・・・!!!」

キンジは口をあんぐり開いたまま固まった。

「思い出してくれたか？キンジ」

「・・・そうか、金助だったのか」

「積もる話もあるだろうが、それは後でな？」

俺は目でキンジに前を向くよう促した。

キンジは何か言いたそうな顔をしていたが、渋々前に向き直った。

キンジが前を向くとほぼ同時、教室前方の席の女子生徒が、立ち上がった。

自己紹介でもやらせるのかなーと俺は呑気な事を考えていたが、よく見ると立ち上がった女子生徒はさっき一戦交えたあの少女だった。「死角で見えんかった・・・」

目の前ではキンジが机に突っ伏してた。  
体育倉庫で二人に何かあったということは、キンジのリアクションを見れば一目瞭然だった。

朝はいきなり襲われて名札―武偵高では、4月に全員が名札を付けるルールがある―を確認し損ねたが、今は見える。

『・・・神崎・H・アリア？』

女子生徒の胸に付いた名札の名前を読み上げる。

その時、神崎は教壇の横からキンジを指さしてこう言った。

「先生、あたしはアイツの隣に座りたい」

俺以外のクラスの生徒、絶句。

そして数秒沈黙が続いた後に、クラス中に歓声が起こった。

キンジを見ると、椅子からずり落ちていた。

「よ・・・良かったなキンジ！なんか知らんがお前にも春が来たみたいだぞ！

先生！オレ、神崎さんと席変わりますよ！」

するとキンジの真右に座っていたツンツン頭の男子生徒が立ち上がるなりキンジの手を振りながら満面の笑みでそう言った。

てかでかいなコイツ。185センチある俺よりもでかいぞ。

「あらあら、最近の女子高生は積極的ねえー。じゃあ武藤君、席を代わってあげて。」

先生がうれしそうにキンジと神崎を交互に見ながら言った

一旦ここまでの流れを整理しよう。

・朝、二人は爆弾事件に巻き込まれて、体育倉庫で何らかの接触をし、恐らくキンジが何か神崎を怒らせるようなことをした。

・俺のクラスは、キンジと神崎が一緒だった。

・神崎が突然キンジの隣に座りたいと言い、武藤というキンジの友人らしき生徒が何やら勘違いをして、うれしそうにキンジの隣の席を譲った。

駄目だ、全く状況が掴めない・・・

ふと周りを見ると、金髪の神崎と同レベルの小ささの理子という女

生徒が「フラグがバツキバキ」だの「熱い恋愛の真っ最中」とかよくわかんないことを言いながら机に突っ伏して落胆しているキンジの机のまわりをよく分からないステップを踏みながら回っていた。周りの生徒は、なんだかキンジにあらゆる罵声を浴びせていた。

ズガガン！！

そんな若干シュールな光景を眺めていると、突然二連発の銃声が鳴り響いた。

よくわかんないけど、今のやり取りで何故か顔を真っ赤にした神崎が2丁の大型拳銃のガバメント（M1911）をぶっ放したらしい。「れ、恋愛なんて……くっつたらない！」

チン、チンチンチン……

銃から排出された2つの葉きょうが落ちる音が響いた。

良く分からない舞を踊っていた理子は、ロボットのようなカチカチした動きで自分の席に早急に戻った。

いくら校内での発砲が許可されているとはいえ、このタイミングでいきなり銃をぶっ放されたら俺のような軍人ほど発砲に慣れていなければ、そりゃあビビるだろう。

「全員覚えておきなさい！そういうバカなことを言うヤツには……」

┌

これが、神崎・H・アリアの皆に向けた唯一の自己紹介だった。

「風穴あけるわよ！！」

2 - Aの教室に、天井に向けて放たれた、乾いた銃声が響いた。

第1話〜遠山キンジと神埼・H・アリア〜（後書き）

擬音が何気に難しいです



## 第2話　ランク決めと奴隷宣言（前書き）

激しい腹痛の中書いたため、文章が変かもしれません

## 第2話〜ランク決めと奴隷宣言

昼休みになるやいなや俺は質問攻めにあっていた。

クラスの連中どころか、噂を聞きつけた他のクラスから来た奴らも交じって、教室は飽和状態だ。

そんな状況だが、悪い印象を持たれないためにもきちんと質問―一度だけ何故かスリーサイズを聞かれた―に答えなければいけない、神崎関連で俺のように質問攻めにあいそうになって逃げた従兄をこの時は恨めしく思った。

「前の学校では専門科は何だったの？あとここではどこに入る予定なの？」

ふと、そんな質問をされた。

やっとまともな質問が出てきたな・・・

『ニューヨーク武偵高ではレサート諜報科で、Sランクだったよ。ここではアサルト強襲科に入るつもりなんだ』

そう回答したところSランクのところで歓声上がり、強襲科以外の生徒からは

「強襲科なんて物騒なところ止めて探偵科インクスタにおいでよー!!」

「Sランクなのに科を変えるなんてもつたないよ！諜報科にしな

よー！」

「いや、車輛科ロソクにすれよー！」

「衛生科メディカにするべきよー！」

「情報科インフォルマだー！」

といった感じの意見―願望が出てきた。

ここは理由を話すしかないな。

『あゝ、悪いけど強襲科になるのは決定事項なんだ。俺は武偵であると同時に、米陸軍の特殊部隊デルタフォースに所属していて、そ

この司令官でもある父の命令で強襲技術を磨かないといけないんだ。

俺は強襲科を選ぶ理由をきちんと説明し、その場の争いを収めた。

「……え？」

周りの皆が唾然としている中、一人の男子生徒がこう聞いてきた。

「デルタフォースって、あのデルタフォース！？確かデルタフォースの入隊できる最低の階級が2等軍曹だったよね？……失礼かもしれないけど、毒島君の階級は？」

詳しいものだ、と感心しながら俺は質問にこう答えた。

「少佐だよ。」

2-A教室に、荒っぽい武偵高ではかなり珍しい長時間の沈黙が流れた。

放課後、俺は強襲科を担当している蘭豹ランヒョウに呼び出され、廃ビルの前に来ていた。

なんでもランクを決める為にテストをするらしい。

アメリカから来たばかりでしっかりした武装をそろえられていないので、テンションはかなり低い。

今持ってきているベレッタM92Fだって、軍から支給されたもので元は俺の銃ではない。

それにナイフも急いで購入した安物だ。

唯一の救いは自作して作ったスタングレネードだな。あくまでも自作の域を超えないけど。

自分の装備に肩を落としていると、後ろから声がかげられた。

「蘭豹先生。」

「来たか毒島。キチンと武装してきたな？」

振り返ると、立っていたのは蘭豹だった。

男物っぽいTシャツとカットジーンズを着ており、背中には2mはあるであろう長刀を背負っていて、何より腰まであるでかくて長いポニーテールが特徴的だ。

かなりの美人なのだが、凶暴な性格にバカみたいな怪力の持ち主の為雌ゴリラと呼ばれている。ーキング情報ーらしい。

『はい先生。』

無論、嘘だ。

「よし、それじゃテストの詳細を説明するで。お前にゃは武装した強襲科のガキ共と一緒にこの廃ビルに入って、他の奴を相手に捕縛しあってもらう。以上や。何か質問はあるか？」

ずいぶん短い説明だなと思いつつ、ありませんと返事をする。

「じゃあ中に入れ。サイレンが鳴ったらスタートや。」

そう言つて、蘭豹はビルの横にある小さな建物に入つて行った。

『さーて、がんばりますか。』

俺は廃ビルの戸に手をかけ、開けた。

中はそれなりに広く、遮蔽物は正方形の柱がいくつかあるだけだった。

周りの状況を確認していると、サイレンが鳴った。

俺は、1階に誰もいないことを確認してから2階へ続く階段を登った。

普通の人は、隠れながら慎重に進むだろう。

だが、俺は違う。

諜報専門の兵士になるために物心がつく前から父にハードな訓練をやらされていて、そのおかげで俺は人の気配を察知する能力が異常に高いのだ。

よつて、俺に対して学生の武偵レベルの待ち伏せは意味を成さるのである。

階段を登っている途中で、2階に何人かの隠れている気配を感じた。どうやら他の生徒達は、手を組んで一気に多人数で攻めて終わらせる作戦らしいな。

『だが甘い。』

俺は脇のホルスターからベレッタを抜いて階段を駆け上がり、直ぐ近くの柱の陰からナイフを持って飛び出してきた男子生徒の足に弾

を当てて体制を崩し、一気に距離を詰めて首の後ろに手刀を喰らわせて気絶させた。

次に俺はナイフを左手で取り出して、右の瓦礫から出てきたナイフを持った男子生徒と拳銃を構えた女子生徒に向かつて構える。

銃の射線から逃れるために、突っ込んでくる男子生徒の陰に隠れた。斬りかかろうとナイフを少し振りかぶった男子生徒にかなり至近距離まで肉薄してナイフを封じ、右肘を鳩尾に入れる。

そして気絶した男子生徒を盾にして、発砲しかねている女子生徒の脇腹に発砲して狙いを外させてから接近し、ナイフを突き付けて反抗できなくさせた。

『チヨロイな』

俺は生徒達を縄で柱に巻きつけ、3階に向かった。

3階を制圧した俺は、結構時間はかかったがその勢いのまま全ての階の生徒を倒し、捕縛した。

残りが居ないのを確認して、ビルを出た。

余談だが、3人ほど抜き打ちで教官が居たのだが、勝てないと判断してウマ〜くやり過ごして放置した。

ビルを出ると、蘭豹が俺を待っていた。

「なかなかやるやないかい。時間がかかったとはいえ、まさか全員を捕えるとわ思わなかったで。」

『お褒めの言葉、ありがとうございます。』

蘭豹の褒め言葉に、軽く礼をしながら答える。

「ところで偶然遭遇しなかったのかは知らんが、中に教官3人を抜き打ちで隠れさせていたんだが気づいとったか？」

『いえ、それは気づきませんでした。』

気づいてたのに無視して戻って来たとは知られたら何を言われるか分からなかったので、嘘の返答をする。

「そうか。まあそんなことはええわ。とりあえず結果を言うで。」

毒島、お前はAランクや。」

Aランクか、まああのモード>を使わなかったのだから妥当な結果だろう。

結果にある程度満足した俺は、蘭豹に一礼してその場を去った。

俺は第三男子寮のキンジの部屋の前に立っていた。

高天原先生にこの部屋を使うように指示をされたからである。

『教務科には従兄だつてこと教えてないのにな。』

とりあえず中に入るためにインターホンを押した。

中からドタドタと足音が聞こえて、直ぐにドアは開かれた。

「どちら様・・・つて金助？どうしてここに？」

中からドアの隙間からキンジが顔を出した(当たり前だ)。

『他に空き部屋が無いらしくてね、ここを使えって先生が。入って良いか？』

事情を説明し、俺は部屋の中に入った。

すると、中には何故か朝襲ってきた神崎・H・アリアがいた。

『ゲ、神崎・・・!』

朝のことを思い出し、露骨に嫌な声を出してしまった。

「アリアで良いわよ。それとゲ、つてなによ。あたしが何かしたかしら？」

コイツ、どうやら朝の出来事を忘れてやがるな。

若干イラツとした俺は朝襲われたことを、嫌みたらしく説明してやった。

『・・・てことでお前はキンジと俺を間違えて襲つたつてこと？』

アリアが言うには、興奮していたアリアは、一旦どこかへ行ったキンジが戻って来たと勘違いして襲ってしまったらしい。

ていうかキンジはアリアに何をしたんだろう・・・。

キンジの方を見ると、少し顔をうつむかせた。

そうか、あのモードか・・・

「そうよ。悪かったわね。・・・てことはあの時に逃げたのはキン

ジだけじゃなくてコイツも・・・キンジだけのつもりだったけど、  
決めたわ。」

アリアは少しためてから、こう言った。

「キンジ、金助。アンタ達、あたしのドレイになりなさい！」  
俺とキンジの中から魂が抜けていくのが分かった。

第2話、ランク決めと奴隷宣言、(後書き)

蘭豹の関西弁が微妙でまとまらないですw w



第3話〜仮面の男と神殺し〜（前書き）

今回は長めです。

### 第3話〜仮面の男と神殺し〜

まさかの奴隷になれ宣言のあと、何故かある女物のトランクを部屋の隅にどけて、アリアの要望―実際は命令に近い―で3人でインスタントコーヒーを飲んでいた。

このコーヒーなかなかいけるな。とか考えている俺の横で、アリアは出されたインスタントコーヒーを不思議そうな目で見ています。

「これホントにコーヒー？」

「どうやらアリアはインスタントコーヒーを知らないらしい。」

「それしかないんだから有り難く飲めよ」とキンジ。

「・・・ヘンな味。ギリシャコーヒーにちよつと似てる・・・んーでも違う」

毒味をするようにインスタントコーヒーを飲んでアリアはそう言った。

なんて贅沢な奴だ。一回アリアには我がデルタフォーエース名物のコーヒー 別名：黒い水 を飲ませなければいけないようだ。あれほど不味いコーヒーは世界中探してもなかなか無いだろうからな。

「味なんかどうでもいいだろ。それよりだ」

キンジは一度区切ってコーヒーをすすり、テーブルの椅子に腰をかけて続ける。

「今朝助けてくれたことには感謝してる。それにその・・・お前を怒らすような事を言ってしまったことは謝る。」

でも、だからってなんでここに押し掛けてくる」

そう口をへの字に曲げながらキンジが言うと、アリアはカップを持ったまま、きろ、と紅い目だけを動かしてキンジを見て、口を開く。「分かんないの？」

「分かるかよ」

「あんたならとっくに分かっていると思ったのに。んー……でも、そのうち思い当たるでしょ。まあいいわ」

いや曖昧過ぎだろアリアさん。

ズズズ……コーヒーウマウマ。

「ねえ、おなかすいた」

アリアは話題を変えつつ、ソファの手すりに身体をしなだれかけさせた。

コイツっていきなり女っぱい仕草をするんだな。

キンジは顔逸らしてるし。

ていうか俺も腹が減ってきたな。

「なんか食べ物ないの？」

「ねーよ」

『え？無いの？』

「ないわけではないでしょ。あんた普段なに食べてんのよ」

「食いものはいつも下のコンビニで買ってる」

「コンビニに？ ああ、あの小さなスーパーのことね。じゃあ行きましよう」

「じゃあって何でじゃあなんだよ」

「バカね。食べ物を買うに行くのよ。もう夕食の時間でしょ？」

おお、これがズレ漫才というやつか。言葉のキャッチボールが成立していないぞ。

ていうかアリア、ここで夕食食ってくつもりなのかよ。

キンジが頭痛っぽいなかで頭を押さえていると、アリアはバネでも付いてるかのようになり、ぴょん！とソファからジャンプして立ち上がり、キンジにとこと近づいて上目使いでキンジを見上げる。うわ、やっぱりちっさいな！。

「ねえ、そこって松本屋の『ももまん』って売ってる？ あたし、食べたいな」

ということまで3人でコンビニに行くことになった。

ももまんとは、一昔前にちよつと流行った桃の形をしただけのごく普通のおまんらしい。

それをアリアはなんと7個も買ったのだ。

全部食べるわけないよな、と思っていたが、もうすでに5個平らげている。

ちなみにキンジはハンバーグ弁当、俺は材料を買ってきて台所で炒飯を作っている。

やっぱり料理が出来るってのは良いよな。

皿に乗せてリビングに行く、キンジはさっきの奴隷宣言の意図を確かめていた。

「ドレイってどういう意味だ？」

「強襲科であたしのパーティーに入りなさい。そこで一緒に武偵活動をします。もちろん金助もね」

アリアはももまんをほおびりながらモゴモゴと説明をする。

てかドレイってそういう事かよ。

『強制ですか……』

「何言ってるんだ。俺は強襲科がイヤで、武偵高で一番マトモな探偵科に転科したんだぞ。」

それにこの学校からも、一般の高校に転校しようと思ってる。武偵自体、やめるつもりなんだよ。

それを、よりによってあんなトチ狂った所に戻るなんてーームリだ」

俺はキンジの横に座りながら話を聞く。

ていうかキンジが転校するつもりだっていうのは知らなかった。

昔は金一さんみたいに立派な武偵になるってはりきってたのにな……。

まあその目標だった金一さんが亡くなったんだから、分からない話でもない。

初代・かの有名な名奉行、遠山の金さんから続く遠山家の人間は先祖代々正義の味方をしていた。

時代によりその職業は違ったが、遠山家の人間はヒステリア・サブアン・シンドローム（HSS）ー俺とキンジはヒステリアモードと呼んでいるーという神経性の特殊な遺伝能力を持っていて、恋愛時脳内物質が一定以上分泌されるとそれが常人の30倍もの量の神経伝達物質つを媒介して、大脳・小脳・脊髄などの中枢神経の活動を劇的に亢進させ、論理的思考力・判断力・更には反射神経もが飛躍的に上昇し、一時的に人が変わったようなスーパーモードになったー当然キンジや俺にも遺伝しているーのだ。

ちなみに恋愛時脳内物質の分泌を、一言で言えば「性的に興奮すること」であるー俺は例外だがー。

キンジの兄の遠山金一はヒステリアモードを完全に操る非常に優れた武偵でとにかく強く、正しく、そして誰よりもやさしい人だった。味方が敵に囲まれて他の仲間から見捨てられた時も、金一さんは見捨てずに無傷で助け出したという話もあるほどだ。

だが、金一さんは去年のクリスマスに浦賀沖で海難事故に遭い、乗客を全員避難させたがそのせいで逃げ遅れた金一さんは帰らぬ人となった。

搜索しても死体は見つからず、それどころか乗客たちからの訴訟を恐れたクルージングイベント会社、そしてそれに焚きつけられた一部の乗客たちは、事故の後金一さんを激しく避難した。

曰く、「船に乗り合わせていながら事故を未然に防げなかった無能な武偵」と。

ネットや週刊誌、それにテレビなどのあらゆるメディアで避難され、遺族であるキンジに罵詈雑言を吐き、更に謝罪しろとまで言ったのだ。

俺は情報操作でキンジとの繋がりを隠ぺいしていたので何もなかったが、そのニュースを見ているだけで胸が痛んだ。

金一さんは人を助けて犠牲になり、スケープゴートにさせられた。

キンジは、この事件の原因を「武偵なんかをやっていたから」とし、金一さんが武偵になる要因――兄を破滅への道へ追いやることとなったヒステリアモードになることを嫌になった、と聞いた。

キンジが武偵をやめると言っても無理はない。

だがそれに対しアリアは、

「あたしがキラいな言葉が3つあるわ」

と聞いていない。

何だよ感傷にひたってた俺がバカみたいじゃねえか。

キンジも同じ考えらしく、

「聞けよ人の話を」

と反論する。

「『ムリ』『疲れた』『面倒くさい』。この3つは、人間の持つ無限の可能性を自ら押しとどめる良くない言葉。あたしの前では二度と言わないこと。いいわね？」

そう言っただけアリアは7つ目のももまんを平らげた。

「キンジのポジションは　　そうね、あたしと一緒にフロントがいいわ。金助はまだ実力が良く分かってないから保留ね」

『保留って扱い酷くない？』

ちなみにフロントとは、フロントマン、武偵がパーティーを組んで布陣する際の前衛の事である。

最前線で戦うため、負傷率ダントツの危険なポジションである。

「よくない。そもそもなんで俺なんだ？」

とキンジが理由を聞こうとすると。

「太陽は何で登る？月はなぜ輝く？」

『いや話跳び過ぎだろ・・・』

そんな俺の言葉もむなしくアリアは続ける。

「キンジは質問ばかりで子供みたい。仮にも武偵なら、自分で情報を集めて推理しなさいよね」

イヤお前にだけは言われたくねえよ。

と言いつつになったが、逆鱗に触れそうだったのでこらえる。

『(キンジ!)』

俺は小声でキンジに話しかける。

「(ああ、分かっている。こいつとは、会話のキャッチボールが成り立たない。対抗するにはこちらも自分の要求を単刀直入にたたきつけるしかない。そうだろ?)」

『(その通りだ。てことで行け)』

アリアの死角でキンジに親指を立てた右手を出す。

キンジはそれにうなずいたあと、アリアに向かって斬りこんだ。

「とにかく帰ってくれ。俺は金助と話したいことがあるんだ。帰れよ」

これはなかなか良かったんじゃないだろうか。と思つてた矢先、アリアはこう答えた。

「まあ、そのうちね」

俺は椅子からズルツと滑り落ちた。

「そのうちっていつだよ」

「あんた達が強襲科であたしのパーティーに入るって言つまで」

『(頑固だな・・・!)だがもう夜だぞ?』

「なにがなんでも入ってもらうわ。私には時間が無いの。うんと言わないなら・・・」

アリアはそこで言葉を止める。

「いわねーよ。なら? どうするつもりだ? やってみろ」

キンジが毅然とした態度で断ると、アリアはその大きな眼でキンジをにらみ、こう言った。

「言わないなら、泊ってくから」

『「・・・はあ!?!」』

俺とキンジの顔が、痙攣を起したように引きつる。

「ちょ・・・ちょっと待って! 何言つてんだ! 絶対ダメだ! 帰れ!」  
キンジが慌てて止めに入る。

当然だろうな、ヒステリアモードになる要因を泊めるなんてことキンジが許すはずがない。

「うるさい！泊ってくつたら泊ってく！！長期戦になる事態も想定済みよ！」

と言ってアリアは部屋の隅に置いてあるトランクを指さした。

『「あれ宿泊セットかよ！！」』

キンジとシンクロツツコミをしたところで、アリアが突然態度を変えた。

「 出てけ！！！」

『いや何で！？それはこっちのセリフだぞ！？』

「な、何で俺らが出ていかなきゃいけないんだよ！ここはお前の部屋か！」

「分らず屋にはおしおきよ！外で頭冷やしてきなさい！しばらく戻ってくるな！」

子供みたいに両こぶしを振り上げ、アリアは俺たちにネコのような犬歯を剥くのだった。

『追い出されちまったな・・・』

「そうだな・・・しかも中から鍵かけられてるし・・・」

俺とキンジは、部屋の前で肩を落としていた。

『せつかくゆつくり話でもしようとしたのにな・・・まあまた今度の機会にするか』

「だな。で、この後どうする？俺はコンビニで時間つぶすけど」

『ん・・・俺は少し散歩してくるかな？』

キンジの問いに、少し考えてから答えた。

「そうか。学園島の中は多分安全だろうけど一応気をつけるよ。」  
キンジはそう言い残して下に降りて行った。

『俺も行くか』

俺もキンジの後を追うように下に降りた。

『夜中の一人散歩なんて久しぶりだな・・・普段は基地の中で訓練ばかりしてたし、外にいても基本的に誰か付いてきてたしな』



散歩に出たは良いが、行くところを思いつかなかつたためとりあえず海岸沿いに歩くことにした。

潮風が気持ちいい。

『てか東京湾ってどんな魚居るんだろうな・・・潜って取りに行こうかな?』

などということの本気で考えていたら、いきなり自分の真上に殺気を感じたのでバックステップで下がる。

俺がバックステップをした直後、元々俺が居た場所に刀が突き刺さった。

上を見ると、電柱の上にトレンチコートみたいな服を着ていて、能などでよく見かけるような面を付けた男が立っていた。

若い感じがするが、それでいて熟練した武人のような重い威圧感を放っている。

『いきなり襲ってくるとは・・・何者だ?』

右手でベレッタを抜きながら、俺は仮面の男に声をかけた。

「フッフ、そう身構えるんじゃない。君とは戦うつもりはない。」

ハッキリと丁寧な中に、子供のような無邪気さを兼ね備えたような声で男は返してくる。

『何者だと聞いている。答える』

俺はベレッタを仮面の男に向けた。

「戦うつもりはないと言っただろう?それとも君は僕との死合いを望むのかな?」

気がつくとも仮面の男は俺の目の前に立っただけで、ベレッタを持つ右手を掴んで動けなくさせられていた。

速い・・・!!ヒステリアモードじゃなかったのを差し引いても、速い。

動きが待たなく見えなかつた。

仕方なく俺は空いている左手を上げて降参の意を示す。

仮面の男は俺が降参したのを確認して仮面で隠れているので良く見えないが、手離してから手を離れた。

「ではまず私が名乗ろうか。私は鎌。君に渡すものがあつて来た。」  
鎌と名乗る男は、背中に背負っていた細長い袋に入った何かを俺に差し出してきた。

『これは・・・？』

「星伽・毒島から預かりし神器が一つ。神殺し、受け取るがいい」  
毒島のところで若干ビクツと反応しつつも、言われるままに細長い袋を受け取ると、ずっしりとした重みが伝わってくる。

『・・・刀か』

袋の中身を取り出すと、平均的なものよりも若干長めの日本刀が入っていた。

「先に言っておくが、その刀は普通の刀ではない。その名の通り、神を斬る為に作られた刀だ。」

そして、君はこの刀を用いてあるものを守らなくてはいけない。これはもう、逃れられない運命だ」

『何でそんな代物を俺に渡すんだ？』

どれだけ考えても、何故俺なのかが分からない。

だが、男から帰って来た答えは予想以上の物だった。

「君が森羅蒼天流の後継者だからさ。それが一番の理由だ。」

森羅蒼天流とは、昔から毒島家につたわる秘剣で、その技は全て必殺の剣になり得る程の剣術である。

俺は、森羅蒼天流を母から直接受け継いでいる。

それを知っているのは毒島と深い関わりを持つ遠山家の一部の物が、こちらも同様深い関わりを持つ星伽の人間の可能性が高い。

それ程の機密情報を、こいつは知っている。

それどころか、俺に関する情報はほとんど筒抜けと考えても良いだろう。

「納得がいつてないみたいだね。まあ当然か。その刀の事は、星伽の人間から聞けばいい。」

ということ、僕は帰らせてもらうよ。君とはまた遠くない未来に会う、そんな気がする。

その時に、また会おう。」

そう言つて男は姿を一瞬で消した。

さっきは心地よく感じた潮風は、今となつては冷たく吹き付ける、不愉快な風になっていた。

第3話〜仮面の男と神殺し〜（後書き）

後半の文章が自分でも良くわかんなくなってしまうましたww  
以後、気をつけます

#### 第4話〜幼馴染と凸凹トリオ結成〜（前書き）

前回の話、無理やり感が凄かったですね（自分で言うな）  
ただ、早めに仮面の男を出しておきたかったもので・・・

## 第4話 幼馴染と凸凹トリオ結成

鎌れんと名乗っていた男が消えたあと、神殺しを背中に背負い俺は帰路についていた。

あまり気分が良くないので、今日はもう寝てしまおう。

そう考えながら歩いていたら、前方から足音が聞こえた。

カン・・・カカン・・・

何この音・・・下駄？

真つ暗で姿は確認できないが、これは恐らくアイツだな。

「白雪」

暗闇の中から姿を現した巫女姿の少女に、そう呼びかけた。

「え？・・・もしかしてキン君？」

透き通るような綺麗な雪肌、綺麗な長い黒髪、整った顔立ち。

絵に描いたような大和撫子のこの少女は、星伽白雪ほしあきゆき。

代々続く星伽神社の巫女で、俺とキンジの幼馴染だ。

昔日本に来た時、俺は基本的に白雪の実家である星伽神社にお世話

ー基本男子禁制なのだが、遠山と毒島の家者だけは例外で入れ

る。さらに、俺の両親は父が遠山で母が毒島の家の人間のため、俺

は星伽と特別縁が深いーになっていた。

そのときに良く遊んでいた子供の一人が白雪だ。

『久しぶりだな、白雪。確か最後に会ったのは4年くらい前だった

よな。』

「いつ日本に帰って来たのキン君？ あと今着てるそれって、武偵

高の制服？」

ちなみに白雪はキンジを「キンちゃん」、俺を「キン君」という呼

び方で呼ぶ。

ややこしいっいたらありゃしない。

『今日の朝こつちに着いてね、今日から東京武偵高に転入したんだ』

俺がそう言つと白雪は信じられないといった顔をしたあと、うれし

そうに俺の手を握ってぴょんぴょん跳ねながら

「ホントに！？キン君がうちの学校に！？わーいと大声で喜んでる。」

近くに寮無くて良かったな。明らか近所迷惑だぞこれ。

『高校生になつて大人になったかと思つたけど白雪はまだ子供だな』  
そう言い白雪の頭にポンと手を置く。

「キンちゃんと同じこと言ってる。」

白雪は若干頬を赤らめ、顔を少し逸らしながら答える。

風邪でも引いてるのかな？

星伽に健康管理を徹底されている白雪が風邪なんて珍しいな。

『あ、そういえば白雪』

星伽で思い出した。これのことを。

「なに？キン君」

笑顔で白雪が聞き返してくる。

『白雪、この刀を知ってるか？』

そう言い、俺は神殺しを出して白雪に見せた。

すると白雪は表情を一変させ、まるで国宝でも見るような眼で神殺しをじっくり見回す。

「・・・これ、何でキン君が持つてるの・・・？これは本来しかるべき場所に保管されているはず・・・」

驚愕した顔の白雪に、俺はさっきの男との間にあつた出来事を白雪に説明した。

『そういうわけで白雪、何かこの刀について知ってるか？』

「ゴメンねキン君。私はこの刀のことはあまり知らないの。」

ただと少しだけなら知ってる。この刀は星伽に代々伝わる秘宝の一つで、詳しくは言えないんだけど特別な金属でできていて、使用者を選ぶの。刀が。」

『刀が使用者を選ぶ？なんだそれ？』

俺は思つた疑問をそのまま口にした。

「ゴメンね、そこまでは分かんないんだ・・・」

白雪は顔を俯かせる。

『白雪は悪くないよ。それほど機密扱いな代物なんだろう？』

コクツ、と白雪はうなずく。

しかし尚更分かんなくなつたぞ。

『じゃあもし何か分かつたら教えてくれ。』

白雪を部屋に送り、そう告げて俺は今度こそ部屋に帰り、寝た。

――余談だが、アリアが仕掛けた対人地雷等のせいでベッドがある  
寝室の中に入らず、別室で寝た。

翌日の5時間目、俺は強襲科で最低限のノルマをこなし、一人で射撃訓練をしていた。

ガキの頃から銃を触っていたから、射撃は俺の十八番だ。

単純に射撃だけなら、ヒステリアモードを使わずともSランクに近い腕を持っている。

速攻で狙いを定め、引き金を引く。

ズガガガガン！！

ブレッタから発射された弾は、全てターゲットの中央付近に当たる。

「凄いな、毒島君。全弾命中なんて」

マガジンを交換していると、後ろから誰かが話しかけてきた。

『君は・・・確か同じクラスの不知火君だったね。何か用かい？』

話しかけてきたのは、同じA組で同じ強襲科の不知火亮だった。

イケメンで礼儀正しく、性格も真面目で武偵高では珍しい人格者で、  
キンジ曰く「モテる」らしい。

ランクはAで、ナイフ・格闘・射撃の全てで安定したスキルを持っている、とキンジが言っていた。

「不知火でいいよ。実は、毒島君がアメリカ陸軍のデルタフォースの隊員だつて話を聞いてね、少しCCCで手合わせして貰えるかい？」

噂に聞いた通り礼儀正しいな。

こいつとは上手くやっていけそうだ。



『いいぜ。じゃあやろうか。』

俺たちは軽装のA装備に着替えて、体育館みたいな訓練施設に移動した。

噂の(？)転入生が格闘での模擬戦をやると聞いて、気づけばそれなりにギヤラリーが出来ていた。

『さあ、始めよう。先手は譲るよ。』

そう言い、柔術の構えをとる。

「ん？軍隊格闘じゃないのかい？」

『それでも良いんだけど俺は柔術が得意なんだ。』

「そう。じゃあお言葉に甘えて僕から行かせてもらおうよ！」

不知火は、接近して左足で足払いをしてきた。

『なかなか鋭いが、甘い!!』

俺は不知火の足払いに対し、右足を絡めて不知火の動きを制限させる。

「くっ!!」

不知火は投げ技をしようとしたのか、苦し紛れに俺の右手を掴んできた。

『ぬん!!』

掴まれた右手を利用して後ろに引き、不知火が前かがみになったところで絡ませた足も引いて転ばせ、手際良く腕ひしぎ十字固めをかける。

ギヤラリーからは、「おおー!!」という歓声が上がった。

俺の脚にタップしてきたたので締めをやめて、不知火が立ち上がるのを手伝う。

「流石だね、手も足も出なかったよ」

苦笑いしながら不知火が言う。

『一撃目の足払い、あれが駄目だった。柔道の足払いのようにやるとさつきみたいになるから、こうするんだ』

一気に身をかがめ、右足を伸ばしたまま回転して不知火の足を払う。体制を崩して倒れたが、そこは流石Aランクの不知火、きちんと受

け身をとっている。

『ちなみに今のは相手が武器を持っているときに有効な技だ。いきなり低い攻撃がくるから、よほどの使い手でない限り跳んでかわすしかなくなるんだ。』

不知火は立ち上がりながら成程、と相槌を打ってくる。

『だが、不知火は俺が足を絡ませたときに転ばずに、更に反撃してきた。ホントはあの時に転ばすつもりだったんだけどね。

だから、気を落とすことは何もないからね。』

授業時間が過ぎていたので、じゃあね、と言い残して俺は強襲科の施設を後にー出来なかった。

さっきの模擬戦を見ていたギャラリー達が、こぞって挑戦してきたのである。

結局、何故か暴徒と化したギャラリー全員を同志討ちをさせたりして全員倒し、部屋に帰る頃には日が沈みかけていた。

強襲科での乱闘騒ぎの翌日、しばらく部屋から出ないとキンジとアリアに告げ、俺はやっと届いた荷物を自室に運んで中を整理していた。

届いた段ボールは、大小合わせて6つ。

それぞれに「武器?」「武器?」「機材?」「機材?」「機材?」

「衣類」と書かれている。

俺はまず、普通サイズの「武器?」の段ボールを開けた。

中には、アメリカで愛用していた銃器と付属品、予備パーツに改造用パーツなどがびっしりと詰められていた。

その中から俺は2丁の大型拳銃、H & amp; K SOCOM (Mk23) を取り出した。

『やっぱりSOCOMは良いねえ』

俺が手にしてる2丁のSOCOM、実はこれ、俺が一から組み立てて色々とアレンジー改造とも言っーを加えた俺専用の拳銃である。

施した改造の例を上げると、薬莖の排出を速くして連射速度を上げたり、マガジンを外してから銃の横に取り付けたスイッチを切り替えると内部の機構が変化して50口径の弾を撃てるようになる改造――これはかなり金がかかっていて、多用すると壊れやすくなる――もある。

中の者を銃器専用のケースに入れ替えて、武器？の箱に手をかけた中には様々な刀剣が入っていたが、中でも異質なのは、三節棍みたいに柄をいくつにも折りたためるようになっていて、先端は薙刀のような形状で青龍の装飾が施されている武器。

三国志で有名な軍神『関羽』が使っていたとされる、青龍円月刀だ。武器としては重くて使いこなすのが難しいが、上手く扱えばかなり強力な武器となる。

俺はこの武器を折りたたんでいつも背中に隠している。

青龍円月刀を折りたたんで背中に隠してから俺はでかい段ボールに入った機材？を一気に開けた。

機材とは、捜査などに使うコンピューター一式と、それを映す巨大ディスプレイに周辺機器である。

俺の特技の中に、ハッキングがある。

自作したソフトをいくつも用いれば、ペンタゴンにも潜りこめる――実際は軍関係で行ったときにシステムを把握したから――ほどである。

機材を全てセットすると、部屋が物凄く窮屈になった。

最後に衣類の箱を開けると、良く着る私服や軍服、潜入時に着る特殊スーツなどが入っていたが、一番下に衣類に交じって小さい箱が入っていた。

小さい箱を開けると、それは武偵弾がいくつも入った詰め合わせセットみたいなものだった。

武偵弾。それは一発一発が多様な特殊機能を秘めた強化弾。銃弾職人にしか作れず、希少で高価なために超一流の武偵にしか流通しない必殺兵器である。

服をクローゼットにしまい、武偵弾はさつき武器を入れたケースに入れた。

『さーて、機材が届いたわけだし、今後の対策のためにアリアの事でも調べてみるか』

PCを起動させ、全て英語で書かれているサイトでアリアの情報を見つけ、読み上げる。

『神崎・H・アリア。14歳からロンドン武偵局の武偵としてヨーロッパ各地で活躍したSランク武偵。

まあそうだろうな。

武器は2丁のガバメントに2本の小太刀、4つの武器を使いこなすことから二つ名は「双剣<sup>カトラ</sup>双銃のアリア」。ロンドン武偵局にいた時の実績が、99回連続で犯罪者をたった一度の強襲で逮捕。検挙率は100%。

・・・俺はこんな奴に俺は一度襲われたのかよ。

祖母がイギリス王家からDemの称号を授与されていて、貴族である。

だからあんなに世間知らずなんだな。』

金助がサイトのめばしい情報をメモしながらツツコんでいるその頃、キンジはアリアに強襲料に戻るようにアプローチを受けていた。

「今はムリだ。俺にはお前が言ってるような実力はない」

「今は、ってことは何か条件があるの？協力するから言いなさいよ」「協力って・・・!!」

キンジはアリアが知らない間に放った爆弾発言に顔を赤らめる。

実力を出させるために協力する、と言ってたが、それはキンジを性的に興奮させるということと同義であった。

「教えなさいよ！なんでもするから・・・！教えて・・・教えなさいよキンジ・・・!!」

良く考えてみれば、しばらく部屋から出てこないと言っていた金助を除けばこの部屋にはアリアとキンジの二人だけ。

そのシチュエーションとアリアの発言が、キンジをヒステリアモードにしかけていた。

あんなモードになりたくない!!

その思いがキンジを支配し、目の前にいたアリアをソファに突き飛ばし、顔を逸らして言った。

「・・・1回だけだぞ。戻ってやるよ・・・強襲科に。ただし組むのは1回だけだ。

戻ってから一番最初に起きた事件を一つだけ、お前と一緒に解決してやる。それが条件だ」

そこでキンジは言葉を一度区切った。

「だから、転科じゃない。自由履修として強襲科の授業を受ける。

それでいいだろ？」

キンジの考えはこうだった。

自分の手駒を猛烈に欲しがっているアリアに、ヒステリアモードでない平凡な自分を見せつけて失望させる。

それに対しアリアは

「・・・分かったわ。じゃあこの部屋から出て行ってあげる。あたしにも時間は無いし、その一件であんた達の実力を確かめるわ。」

しづしづ、といった形でアリアは承諾した。

「どんなに小さな事件でも一件だからな」

あとからとやかく言われないために、キンジは念を押す。

「OKよ。その代り、どんな大きな事件でも一件よ。」

手抜きはしないこと、そうアリアが付け加える。

「分かった。絶対に手抜きはしない。全力でやってやるよ。」

通常モードの俺の全力、でな。

キンジは心の中で付け加えた。

ちなみに当然パーティーの中には金助も含まれている、ということ

を金助は後になって知ることとなった。

『勝手すぎる・・・』

かくして、アリア・キンジ・俺の一度きりのパーティーが結成された。

#### 第4話〜幼馴染と凸凹トリオ結成〜（後書き）

これで金助君にきちんとした武器を使わせてあげられますね。

実際はもっと早く出す予定だったんですが、武器の設定を考えるのに時間がかかってしまいましたw w

ということで次回、凸凹トリオが事件に挑みます！

第5話〜アリアが居ない夜とバスジャック〜（前書き）

今回は新キャラクターが登場です！  
だれど出番は少ないです



## 第5話〜アリアが居ない夜とバスジャック〜

知らぬ間にアリアとパーティーを組むことが決まった次の日、俺は鎌れんから受け取った神殺しを試すためにアリアと対峙していた。

「やあ！！」

アリアは2本の小太刀を構え、物凄い速度で接近して小太刀を交差させるように斬りかかってくる。

バックステップでかわし、右足で踏み込んで片手で突きを繰り出す。

アリアは片方の小太刀の上を滑らすようにして流す。

直ぐに神殺しを戻し、八相で構える。

アリアは接近しようと一歩踏み込もうとするが、先にこちらから接近して牽制する。

結果、アリアは接近できずに自分から距離を置く。

アリアと俺では身体的にリーチがかなり違い、更に武器もこちらの方が長いのでアリアは俺の懐に入りにくくなっている。

それでも本来、SランクのアリアとAランクの俺の実力差はそれなりにあるので、これくらいのハンデがあろうとアリアが攻めあぐねることはない。

では何故アリアが攻めあぐねているのか？

答えは単純、周りにギャラリーが大勢居てアリアの身体能力をフルに使った素早い動きが出来ないのだ。

ちなみにこのギャラリー、俺が情報を流して意図的に集めた。

常に自分の有利な状況を作れ。というのが父の教えに従っただけで、断じてズルなどではない。

断じて卑怯ではない！！俺は情報を流しただけで直接呼んではー！それを屁理屈というー！いない！！

膠着状態が1分くらい経った時、アリアが我慢できなくなったのか、正面から突っ込んできた。

『功を急いたなアリア。俺の勝ちだ！』

神殺しを振り上げ、アリアに斬りかかろうとした。

神殺しがアリアに届くその直前、突然強襲科の入口が開いた。その場にいた人間全員が入口を振り返る。

唯一人を除いて。

「敵の前でよそ見しない!!」

アリアが小太刀の峰で、思いつきり俺の側頭部を殴った。

「頭は・・・無いだろ頭は・・・」

その言葉を最後に、俺の意識は途切れた。

『・・・ん?どこだここ』

目を覚ますと、真っ白な天井。

薬品の匂いがすることを考えると、ここは救護科アンビュラスの救護室のようだ。アリアに殴られて気絶したあと、誰かに運ばれてきたらしい。

頭は・・・よし、痛みはない。

頭に痛みが無いことを確認し、ベッドから起き上がった。

それと同時に救護室の扉が開いた。

中に入って来たのは、同級生で尋問科タギョウの九澄鏡花くすみきょうかだった。

俺が転入してから、色々と面倒を見てくれている。

ちなみにかんりの美少女だ。

だが綺麗なバラには棘があるという言葉の通り、いざ本業である尋問をする性格が一気に変わって凶暴になる、という噂がある。

「あ、毒島君気がついたの?」

とことことという擬音が聞こえてきそうな歩き方で歩み寄ってくる。

『さつきね。ところで鏡花がここまで運んでくれたのか?』

「うん。そうだよ」

『そうか、それはありがとう。でも重かっただろ?』

俺は身長が高く、自分で言うのもなんだがかなり鍛えてるから体重が80kg近くあるのだ。

「不知火君が手伝ってくれたから平気だったよ」

鏡花が僅かに頬を赤らめて言う。

『不知火が？ あとで礼を言わないとな』

ベッドから降りて、横に立てかけてあつた神殺しを腰に差す。すると鏡花が心配そうな顔をして

「頭の怪我は大丈夫？ 私、見てたけど凄い勢いで殴られてたよ？」と俺に近づいて言ってくる。

身長差があるので自然と上目使いになっている。

これがキンジだったら軽くヒスってーヒステリアモードになる!!ヒスる よりーたかもな。

俺の場合は、何故かは分からないが、異性に興味が殆どないー医者には恋愛てきな感情が欠落してると言われたーため通常の性的興奮でヒステリアモードになりにくいのだ。

一応なれるのだが、よっぽどの事が無いとなれないのだ。

その代りに俺だけに現れた別なヒステリアモードのスイッチがあるのだが、それは次の機会で。

『大丈夫だ。 もう一度言うけど、運んでくれてありがとう。 じゃあ俺はこれで。』

そう言い残して部屋に戻った。

密かにまた鏡花が顔を赤くしているのには気がつかずに。

『ただいまー』

部屋に帰ると、キンジがソファに座って一人でテレビを見ていた。

「おかえり金助。 アリアに殴られて気絶したって聞いたが大丈夫か？」

『大丈夫だ。 ところで俺を殴った女王様は？』

アリアが居ないことを不審に思い、確認する。

「アリアは自分の部屋に帰ったよ。 言わなかったか？」

『そういえば昨日言ってたな。・・・これでやっとゆっくり話せるな。』

「そうだな。 じゃあまずはそっちの話の話を聞かせてくれよ。 少佐になつたんだろ？」

『ああ。何回も潜入任務をこなしてたら、いつの間にか少佐になってたよ。この年でたくさん部下が出来て大変だよ』  
『そう言いながらキンジの横に腰をかける。』

「金正叔父さんは元気か？叔父さんとは去年会ったけどそれ以来何の情報も無かったからな。」

去年といえば、金一さんの葬式か・・・

俺は任務で行けなかったからな。

『父上は元気すぎるんじゃないか、ってくらい元気だよ。今も多分基地で隊員をしごいてるだろうね。』

俺が話すばかりじゃなくて、キンジも話せよ。』

軽くウインクし、キンジに話すよう促す。

「俺は・・・これと言って報告することがないんだよなあ・・・」

『ハハツ、何だよそれ。じゃあ去年強襲科に居た時にやった任務クエストの話でもしてくれよ。』

「そうだな、じゃあ去年の夏にやったあの任務の話にするか。」

あれは確か夏休み直前で、不知火達と一緒にやったんだけどさー」  
俺たちはその夜、時間を忘れて遅くまで語り合った。

次の日の朝、俺はアメリカの父に現状を報告していたため、7時58分のバスに乗ることが出来なかった。

キンジは結構先に行かせたので、そのバスに乗っているはずだ。

徒歩じゃ確実に間に合わないため、男子寮の駐輪場にシートをかぶせて隠しておいたバイクにまたがる。

もしもの為に、ヘルメットは二つ備え付けてある。

そのうちの一つをかぶり、俺は男子寮から出た。

すると、雨の中キンジがバス停の前で立ち尽くしていた。

キンジの前でバイクを止める。

「金助か。なんでバイクなんだよ・・・」

『乗り遅れたのか？乗ってけよ。』

キンジに呼びのヘルメットを渡し、キンジが乗るスペースを空けた。

キンジが乗り込み、俺にしつかり掴まったのを確認してからバイクを走らせた。

雨で滑りやすくなった道を走り、専門校区の前にさしかかったところでキンジの携帯が鳴った。

「アリアか？ 今は強襲科の前だが・・・え？ C装備に着替えるってなんでだよ。授業は5時間目からじゃ・・・」

アリア相手に話していたキンジが、突然口を止めた。

俺はバイクを止める。

『どうしたキンジ？何かあったのか？』

電話を切って携帯を閉じたキンジに問いかける。

すると、キンジから予想外の言葉が発せられた。

「事件が起きたらしい・・・C装備に着替えて女子寮の屋上に来いって」

事件。キンジはそう言った。

最初に起きた事件を、大小問わず一緒に解決する。

それがキンジがアリアに組むことを決めたときに提示した条件だ。

電話越しに軽く聞こえたアリアの怒鳴り声から察するに、大事件だと思われる。

急いでC装備に着替えた俺達は、急いで女子寮の屋上に向かった。

屋上のドアを開くと、無線機に何かを怒鳴っているアリアが居た。

それともう一人。

「レキ」

キンジがドアのすぐ近くに体育座りをしていた少女に声をかけた。

彼女の名はレキ。

狙撃科の生徒で、入試の時からずっとSランクを維持し続けている

狙撃の天才だ。

こんなやつを呼ぶってことは、やはり大きな事件であることは間違いないさそうだ。

「時間切れね・・・もう一人くらいSランクが欲しかったけど、皆

他の事件で出払ってるみたい」

通信を終えたアリアが俺たちに近づいてくる。

「この4人パーティーで追跡するわよ」

「追跡って何をだ？ 何が起きたんだ？アリア」

俺は状況説明をアリアに求めた。  
フリーファイグ

アリアから返ってきた言葉に、俺とキンジは驚愕した。

「武偵高行きの7時58分に第3男子寮前に停車したバス。そのバスに爆弾が仕掛けられたわ」

・・・爆弾？

『それって・・・まさか・・・』

「そうよ」

アリアは言葉を区切り、溜めてからこう言った。

「バスジャックよ！」

第5話〜アリアが居ない夜とバスジャック〜（後書き）

次回、3人がバスジャック事件で奮闘します！  
お見逃しなく！

## 第6話 くバスジャックと消えない傷

アリアはバスジャックの犯人を、最近暗躍している「武偵殺し」なるやつの仕業だと断言した。

『武偵殺しの事を少し聞かせてくれないか？』

「いいわ。武偵殺しは武偵が乗った乗り物に減速すると爆発する爆弾を仕掛けて、遠隔操作でコントロールするの。」

最初の武偵はバイクを狙われたわ。次がカージャックでその次がキングジのチャリジャックで今回がバス。

やつの遠隔操作のときに使う電波にパターンがあつて、キングジの時も、今回もその電波をキャッチしたのよ。」

「でも武偵殺しは逮捕されたはずじゃ・・・？」

「それは真犯人じゃないわ・・・」

「何だつて・・・？何の話をしてるんだ」

「背景を説明してる暇はないわ！それにあんたには知る必要もない。」

このパーティーのリーダーはあたしよ！」

アリアがそう熱弁すると、急に俺たちは何かの陰に覆われた。

上を見るとそこにはヘリが降下してきていた。

こんなものまで用意してるとはな・・・

「・・・クソツ！やりやいいんだろ！」

やけくそ気味でキングジが叫ぶ。

「キングジ、金助。これが約束の最初の事件になるのね」

「大事件だな・・・俺はとことんツイてないよ」

『え？大事件なのこれ？アメリカでは日常茶飯事だったけど』

「約束は守りなさい？キングジ。あんたが実力を見せてくれるのを楽しみにしてるから。」

もちろん金助もね」

「言っておくが、俺にはお前が思っているような力はないからな」

キングジはそう言つてヘリに乗り込んだ。



『対テロ部隊の俺が言うのもなんだけどそんなに期待はしないでね  
俺もキンジに続いてヘリに乗り込んだ。』

「万一ピンチになるようだったらあたしが守ってあげるわ。安心な  
さい」

「・・・」

アリアとレキも乗り込み、ヘリは台場方面に向かって飛び立った。

男子寮前を出た後バスは、どの停留所にも止まらず暴走。その後  
車内からバスジャックされたと緊急連絡が入りました。

現在バスは青海南橋を渡って台場に侵入しています

無線装置からオペレーターの説明が入る。

アリアの話によると、警視庁と東京武偵局の両方は動いてはいるが、  
先に電波を掴んで通報よりも先に準備を始めた俺たちが一番乗りの  
ようだ。

「見えました」

レキの声に、俺達3人はそろって窓の外を見た。

だが、距離がありすぎて車は小さすぎてよく見えない。

「何も見えないぞ、レキ」

「ホテル日航の前を右折しているバスです。窓に武偵高の生徒が見  
えています」

『良く見えるな・・・レキ、視力いくつ?』

「左右ともに6・0です」

軽いノリで超人的な数値を言ったレキに対し、俺らは顔を見合わせ  
る。

ヘリがレキの言った辺りに高度を下げると、本当にバスがあった。  
しかし速いぞ。かなり速度が出ている。

「空中からバスに跳び移るわよ。あたしはバスの外側をチェックす  
るからキンジは内側の状況を確認。連絡して。レキはヘリで追跡し  
ながら待機。」

金助は「

「バスの上で前のセグウェイのようなやつが来ないか監視、だろ？」  
アリアが言おうとした言葉を先に言い、天井のランドセルみたいな  
強襲用パラシュートを装着する。

「流石デルタフォースの隊員ね」

アリアもそう言いながらパラシュートを装着する。

唯一不満そうな顔のキンジは渋々、といった感じで天井からパラシ  
ュートを外していた。

「準備はいいわね？行くわよ！」

俺たちは同時にへりから飛び出し、パラシュートで自由落下に近い  
速度でバスに着地する。

キンジは滑って落ちそうになるが、アリアに支えられている。

アリアはワイヤーを屋上にさして宙吊りの体制でバスの下を確認し、  
キンジは中から窓を開けてもらって内側の確認に入った。

かくいう俺は、強襲科に置いておいたアサルトライフル、M4A1  
カービンを構えて周囲を警戒していた。

「キンジ！そっちの状況は！？」

アリアの声だ。

「アリアの言っていた通り、このバスは遠隔操作されている。そっ  
ちはどうだ？」

「・・・爆弾らしいものがあるわ。カンジスキー 型のC4、武偵  
殺しの十八番よ。見えるだけでも炸薬の容量は、3500立方セン  
チはあるわ！」

「なんだと！？」

アリアの声に、つい叫んでしまう。

いくらなんでも過剰過ぎる炸薬量だ。

バスどころか電車だって楽勝で吹き飛ばせる。

とその時、後ろから物凄い速度で接近してくるオープンカーが見え  
た。

その操縦席には、人の代わりにUZIが乗っていた。

「アリア！後ろだ！！」

「潜りこんで解体を試み　あつ！！」

俺の叫びもむなく、オープンカーはバスの後方―つまりアリアに激突した。

「チツ！！」

俺は舌打ちしつつ、オープンカーのUZIに狙いを付けるが、今にも発砲してきそうな状況だったため屋上に伏せた。

中ではそれに気づいたキンジが生徒たちに声をかけて伏せさせていた。

それと同時に、UZIは側面からバスに向かってまんべんなく発砲した。

銃撃が止むと同時に起き上がり、すぐさまオープンカーに向かって跳んだ。

発砲した直後だったために銃座はこちらに反応するのが遅れ、その間に両脇のホルスターから抜いたMk232丁で銃座を破壊し、オープンカーに乗り込んだ。

「アリア！！大丈夫か！！」

バスの後ろに車を回し、アリアの安否を確かめる。

「ヘルメットをかち割られたけどなんとか無事よ・・・それよりその車・・・」

アリアはワイヤーで屋上に這い上がるうとしていた。

「さっきのつとった。だがまだ安心できない。早いとこ爆弾を解除しないとな」

バスがレインボーブリッジに入る。

車が無いところを見ると、警視庁あたりが手を回したんだろう。

アリアが這い上がったと同時に、ヘルメットを付けていないキンジが側面の窓から出てきた。

「キンジ！ヘルメットはどうしたの！？」

「運転手が負傷して、今代わりに武藤にメットを貸して運転させてる」

「危ないわ！どうして無防備に出てきたの！なんでそんな初歩的な

判断もできないのよ！直ぐに車内に隠れ　　後ろっ！伏せなさいよ！何やってんのバカっ！」

キンジに散々罵声を浴びせ、突然顔色を変えてキンジに向かって突っ込んで行った。

『まさかもう1台来たのか！！』

急いで車をバスの前に移動させる。

すると案の定、UZIを搭載したオープンカーがいて、キンジに狙いを付けていた。

『クソッ！！』

直ぐにMk23を抜いて狙いを付けるが、時すでに遅し。

UZIはキンジに向かって弾を2発発射した。

『キンジ！！』

慌ててキンジの方を見ると、アリアがキンジを庇っておでこに掠るように被弾していた。

アリアも負けじと被弾しながらガバメントでUZIに発砲し、銃座から落としていた。

アリアはそのままバスの側面から落ちそうになったが、キンジが伸びていたワイヤーを掴んで引っ張り上げた。

「アリアっ！！」

キンジがアリアを抱きかかえるなか、銃座を破壊されたオープンカーがバスの横に回り込もうとした。

おそろく体当たりをする気だろう。

『させるかっ！！』

Mk23でオープンカーのタイヤに弾を当て、パンクしたオープンカーは回転しながらガードレールにぶつかり、爆発、炎上した。

そしてその直後――パァン！

と銃声が聞こえてきた。

横を見ると、さっきのヘリがレインボーブリッジの横を並走している。

そしてその開かれたハッチからは、ソ連が開発した狙撃銃のドラグ

ノフを構えたレキがいた。

私は一発の銃弾。銃弾は人の心を持たない。故に、何も考えないインカムからレキの詩のようなことをつぶやく声が聞こえる。

ただ目標に向かって真つすぐ飛ぶだけ

レキがそのセリフを言い終わると同時に、ドラゲノフが、パンパン！と3回銃口を光らせた。

レキが狙撃したのはーバスの下の爆弾。

バスの下から、部品ごと爆弾が転がり落ちた。

ー私は一発の銃弾ー

再びそのセリフを言ったレキは、爆弾に向かって発砲。

弾が当たった爆弾は跳ねるような動きでレインボーブリッジの下、すなわち海に落ちた。

数秒後、ドオン！という爆発音と共に巨大な水柱が上がった。

バスが停車し、俺も横に車を止めてバスの屋上に上った。

そこには、額から血を流して動かないアリアとそれを抱きかかえるキンジが豪雨に打たれていた。

アリアは直ぐに武偵病院に搬送された。

額の傷は、運が良かったとしか言えない。

銃弾はただアリアの額を掠めただけであって、重症では無かった。

被弾したことによって脳震盪を起こしていたが、MRIも撮ったが、脳出血も無く外傷だけで済んだようだった。

翌日、キンジと共に報告書を教務科に提出し、ありったけのももまを手に武偵病院に向かった。

アリアの病室は・・・予想通り、VIPの個室だな。

貴族だから当然だろう。

中に入ると、まず小さなロビーがあつて、そこには「レキより」と書かれたカード付きの白百合カサブランカが飾ってあった。

あの無口でロボット・レキとあだ名されているレキがあんなものを持つてくるとは、少し予想外だった。

パッチン・・・パッチン。

少し開いていたベッドルームからへんな音が聞こえる。

俺とキンジは、不審に思っただけで隙間から中の様子をつかかったところ、でかいベッドに座ったアリアが・・・。

手鏡で自分の額を見ていた。

「・・・」

集中しているのか、こちらに気づく様子はない。

被弾した額には、交差するように2本の傷跡を残して、チャームポイントと自慢していたキーキンジに聞いたキーおでこを台無ししている。

医者に聞いたのだが・・・どうやってもあの傷は跡が残ってしまうらしい。

キーー一生消えない傷が。

パッチン・・・パッチン・・・

アリアはかなり沈んだ顔で、いつも使っていた髪留めを付けては外し、付けては外しを繰り返していた。

・・・かなり気になっていたんだな、あのおでこ。

「アリア・・・」

その光景に耐えられなくなった俺達は、今来たフリをしてドアにノックをした。

「あ、ちょ、ちょっと待ちなさい！」

急でびっくりしたのか、何やらがさごそと慌てた音がする。

「・・・いいわよ」

アリアの許可が出たので中に入ると、アリアは額に包帯を巻きなおしてガバメントの整備をしていた。

いらん早業だな・・・。

「・・・お見舞い？」

露骨に嫌そうな目で俺らを軽く睨んでくる。

「けが人扱いしないでよ。この程度の傷で入院なんて、医者は大げさよ」

「れっきとしたけが人だろ？その額の傷……」  
キンジはアリアの額を見つめ、言葉を詰まらせる。

「傷がどうしたっていうの？何ジロジロ見てんのよ」

「その傷、跡に残るらしいな……」

申し訳なさそうな顔でキンジが言う。

「だから何？別に気にしてないわよ？あんた達もきにしないでいい。  
はい整備終わり」

そう言っただけでガシャン、とガバをぶっきらばうな態度でサイドテーブルに置くと、腕を組んだ。

「私は武偵憲章1条「仲間を信じ、仲間を助けよ」に従っただけよ」

「武偵憲章だなんて……そんなキレイ事をバカみたいに守るなよ」

「……あたしがバカだっていうの？キンジの分際で。でも、

・そうね。こんなバカを助けたあたしはバカだったのかもね」

そう言っただけでアリアはぷい、そっぽを向いてしまった。

「……気まずっ！」

これ以上この空気に耐えられそうになかったので、アリアにももま  
んを渡して部屋を出た。

しばらく外で待っていると、やるせない顔のキンジが出てきた。

『……帰ろうか』

こういう時は慰めたりはせず、そっとしておいてやるのが一番なの  
だ。

そういう俺の気持ちを察したのか、キンジはギリギリ聞こえる声で

「ありがとう」

とつぶやいた。

部屋に帰ってから、キンジはずっと何かを考えていた。

かくいう俺は、武偵殺しのこと何か引っかけたので自室のPC  
で警視庁のシステムにハッキングをしていた。

そこで俺は不自然な事件データを見つけた。

その事件データとは『12月24日 浦賀沖海難事故 死亡 遠山  
金一武偵(19)』、金一さんが死んだあの事故だった。

良く調べると、この事故は明らかに何者かの隠蔽工作によって事故  
とされていることが分かった。

更に気になるのは武偵殺しによるバイクジャック、カージャックと、  
キンジのチャリジャックとの間の期間にこの事件が起きている、と  
いうことだ。

俺の頭に一つの結論が導き出される。

『金一さんの死は、ほぼ確実に武偵殺しに関係している・・・!!』  
俺はいてもたってもいらねず、すぐさま着替えて部屋を飛び出た。

アリア、キンジ、金助、そして武偵殺し。

それぞれの思いが交差する中、事件は佳境へと近づいていく・・・  
!



## 第6話「バスジャックと消えない傷」(後書き)

作者の私が言うのもなんですが、バスジャックの時に主人公いらなくね？

てことで次回はキンジ目線で物語が進行する予定です、

第7話〜アリアの母〜(前書き)

今回は短いです。

## 第7話〜アリアの母〜

結局、キンジはアリアと喧嘩別れをした、ということになってしまった。

アリアにしつこく付きまとわれていた頃のキンジが一番望んでいた結末。

なのに、何故かモヤモヤとしたものが心から無くならない。

何とも言えないイライラした感情を引きずったまま、週末を過ごしていた。

金助はアリアのお見舞いに行ったあの日の夜に「調べることがあるから少しの間家を空ける」と言ってお出掛けのまま、帰ってきていない。

アリアが退院する予定と聞いていた今日は、なるべくアリアの事を考えないように洗濯や掃除などの家事に没頭していた。

だが、それがいけなかった。

昼過ぎに、アリアを見かけてしまったのだ。

偶然クリーニング店に行ってお出た直後、隣の美容院からお出してきたのだ。

そのあまりの変貌ぶりに、キンジはつい足を止めてしまった。

若干重い表情をしたアリアは、ツインテールはそのままで少し髪形を変えていた。

前髪を作っていたのだ。

事情を知らない人が見れば、単純に可愛いと思えたのだろうが、あれは聞くまでも無く額の傷を隠すためのものだろう。

そう思ったキンジの胸の奥にチクリとした痛みが走る。

キンジに気づかずに、アリアはモノレール駅の方へ歩き出した。

アリアの服装は、いつも見かける制服ではなく私服だった。

白地に薄いピンクの柄が入った清楚なワンピースを着たアリアは、ファッション誌からお出してきたように今風で、非常に似合っていた。

今のアリアの写真を撮って雑誌の表紙にでもすれば、あの服は飛ぶように売れるだろう。

そうキンジに思わせるほどアリアの私服は可愛かった。

しかし、普段からアリアは身だしなみに気を使う方だったが、あそこまでおめかしをした姿は見たことが無かった。

「(デートでも行くのだろうか?)」

そう考えたキンジは、ついアリアを尾けてしまっていた。

モノレールに乗り、JRで神田を経由して、新宿で降りた。

気づかれないようにある程度距離をとって歩いてきたキンジには、すれ違う男どもがアリアをちらちら見ているのが分かった。

あれだけの美少女が、あんなにオシャレをしているのだから無理はないだろう。アリアを尾けて行くと、オフィスビルくらいしかないビル街の方向に出た。

そのまま尾行を続けていると、アリアは予想外の建物の前で足を止めた。

新宿警察署である。

「(オシャレした高校生が来る場所じゃないだろ)」

そんなことを考えて気を抜いていると

「……下っ手クソな尾行。シッポがよろによる見えてるわよ?」

アリアが振り返らず、しかし確実にキンジに向けて言った。

「なんだ、バレてたのかよ……。質問せず武偵なら自分で調べなさいって言ったのはお前だろ？」

てか気づいてたならなんで言わなかったんだよ」

「迷ってたのよ。教えるべきなのかどうか。あんたも一応『武偵殺し』の被害者の一人だから」

「? 何のことだ?」

「もう着いちゃったし、まあ良いわ。着いてきなさい」

そう言うアリアにはいつもの覇気がなかった。

警察署に入っていくアリアに、いくつも疑問を浮かべながら着いて行った。

アリアが入ったのは、留置人面会室だった。

少し待って、アクリルの板越しに二人の監理官に連れてこられた女性に、キンジは見覚えがあった。

アリアが普段使っているガバメントのグリップにはカメオが埋め込まれていて、それに彫られていた美人に良く似た女性だった。

柔らかな曲線を描く長い髪、オニキスのような瞳。どこことなくアリアに似ていた。

「まあ・・・アリア。この方、彼氏さん？」

「ちっ、違うわよママ!!」

キンジを見て少し驚いたような顔をしたこの女性が・・・アリアの母なのだろう。

かなり若いな・・・。

母親っていうより、年が離れた姉と言われた方がしっくりくる。

「じゃあお友達かしら？ただでさえ友達を作るのが苦手だったアリアが、ねえ。ふふふ・・・」

「違うのよ。こいつは遠山キンジ。武偵高の生徒で、そういうのじゃないわ」

そこまで否定しなくても良いだろう、とツツコミたかったがここは黙っておこう。

「・・・キンジさん、初めまして。私はアリアの母で、神崎かなえと申します。娘がお世話になってるようですね」

「あ、いえ・・・」

こんなところに居るにもかかわらず、かなえさんはその場の空気を全て柔らかく包んでくれるような感じのする人だった。

実は、キンジはこういう人に少し弱いのだ。

柄になくどきまぎして、滑舌が悪くなってしまう。

アリアはキンジをイラツとした目で睨んで、アクリル板のほうに身

を乗り出した。

「ママ、面会時間が3分しかないから手短に話すけど、このバカは『武偵殺し』の3人目の被害者なの。先週武偵高で自転車に爆弾をしかけられたの」

「・・・まあ・・・」

かなえさんは表情を硬くする。

「更にもう一件。一昨日はバスジャック事件が起きてる。ヤツの活動は、急激に活発になってきているのよ。てことは、もうすぐシッポも出すはずだわ。」

だからあたし、狙い通りまず『武偵殺し』を捕まえる。ヤツの件だけでも無実を証明すれば、ママの懲役864年が一気に742年まで減刑されるわ。」

最高裁までの間に、他も絶対なんとかするから」

アリアの言葉に、キンジは目を丸くした。

「そして、ママをスケープゴートにしたイ・ウーの連中を、全員ここにぶちこんでやるわ!!」

どうやらアリアの母は、いくつもの罪を着せられているようだった。

そのままアリアとかなえさんの話は続いた。

かなえさんが管理官に連れて行かれるまで・・・

そして帰りの道で、母を想うあまりアリアが泣いたのはキンジだけが知るところとなった。

一方その頃金助は、ある人物に電話をかけていた。

『プルルルル・・・もしもし、父上ですか?』

## 第7話〜アリアの母〜（後書き）

早く金助パートに戻したく、ある程度割愛させて貰いました。

次回、ついに武偵殺しとの最終決戦。

そして謎の人物も登場し……

第8話、神殺しの力（前書き）

今回も短めです。



## 第8話 神殺しの力

俺は今、通信科コネットで、通信科の生徒に許可を取って通信機を一式借りて、極秘回線で電話をかける。

『プルルルルル・・・』

俺が今電話をかけているのは、ノースカロライナ州フォート・ブラッグにある陸軍特殊作戦軍団基地にある、第1特殊部隊デルタ作戦分遣隊ーデルタフォースの本部の司令官室。

つまり、父の部屋だ。

「もしもし？誰だ？」

受話器の向こうから、低めの男の声が聞こえてくる。間違いない。父上だ。

『もしもし、こちら毒島金助少佐です』

「おお、少佐か。少佐がこの回線を使うなんて珍しいな。何か用か？」

『はい大佐。実はお願いしたいことがありまして・・・』

「言ってみたまえ」

『現在日本に駐屯している海軍に、調べてもらいたいことがあるのです』

「・・・調べてもらいたいこととは何かね？」

『・・・金一さんが亡くなられた例の事件、浦賀湾沖海難事故で沈没したアンベリール号の調査を』

「何か・・・あつたんだな。分かった、私にまかせたまえ。結果は明日には分かるだろうから明日、少佐の回線に連絡を入れる」

『ありがとうございます。ではまた明日ー』

俺が回線を切ろうとした時、

「待ちたまえ。一つ少佐に伝えておきたいことがある」

『伝えておきたいこと？なんですか？』

「マークしていた例の組織の者が日本に入った。十分用心してくれ」

『はい。分かりました。それでは失礼します』  
そう言っただけは回線を切った。

通信科を後にした俺は、その足で強襲科に向かっていた。  
少し歩くと、直ぐに強襲科に到着した。

なんで休日なのに強襲科に来るのかというと、神殺しを使った訓練  
をするためだ。

あの夜、鎌れんと名乗る男に渡されて以来毎日振っているのだが、この  
刀が特別凄い刀だとは思えない。

切れ味や強度などは業物と呼べる代物なのだが、それだけならあんなに  
大げさな言い方をする意味が無い。

それに白雪が、神殺しは使用者を選ぶ、と言っていた。  
だとすれば俺は使用者として認められていないのだろう。

そんなことを考えながら中に入り、ナイフ術などを訓練する為の  
形を用意した。

『そういえばまだこの刀で森羅蒼天流を一度も使っていないな。．．．  
っ！』

俺の頭に、何故俺にこの刀を渡すのかという問いに対して、鎌が言  
っていた言葉が再生される。

君が森羅蒼天流の後継者だからさ  
『そうということか．．．』

鎌の発言と、今まで何も起きなかった事を考えると、神殺しは森羅  
蒼天流を運用する為に作られた刀の可能性が高い。

百聞は一見に如かずー俺は試しに森羅蒼天流の技を放つことにし  
た。

森羅蒼天流には、元々は同じ剣術であった森羅蒼天流と対を成す流  
派がある。

それが星伽に伝わる『星伽候天流』である。  
星伽候天流が「剛」の剣だとすれば、森羅蒼天流は「柔」、つまり

技の剣ということである。

神殺しを抜刀し、身体の左側に寝かせて構える。  
力を溜め、勢いよく右回りで回転する。

1回転し終わるといふ瞬間、右手に持ったかなりの遠心力がかかった神殺しを横なぎに人形に向かって振る。

『森羅蒼天流一ノ型、「真空波!!!」』

刀を振り切り、回転が止まった直後、人形の腹部には鋭い斬撃の跡がついていた。

森羅蒼天流一ノ型、真空波。

この技は、素早い回転で武器に遠心力を乗せ、更に振る瞬間に手首・肘を一気に捻りながら振る。

最後の毒島家の特別な捻りにより、空気が捻じ曲げられて空気中に一瞬だけ真空が発生し、周りの空気が一気に元の空間に戻ることにより「風の刃」が飛び、

敵を離れた距離から斬りつける技で、森羅蒼天流の奥義の元となる技だ。

だが通常の状態の俺では離れた対象に軽い傷を付けるのがやっとであつた。

なのに何故あんな跡が残つたのか。

俺は振り切つた神殺しを見る。

すると、元々は普通の刀と同じ銀色だった刀身が、黒に染まっていた。

それ以外にも不自然な点があつた。

それは、さつきより明らかに自分の体が軽く感じるのだ。

この感覚、恐らく鬼道術のそれに近いだろう。

ー鬼道術とは、「超能力の」一種でバリエーションは様々。

その中に身体能力を強化する鬼道術がある。

超能力なんて言われても誰も信じないだろうが、実際超能力は存在していて、国家レベルで密かに研究・開発されているー武偵高で言えば超能力捜査研究科(SSR)ーのだ。

とはいえ当然超能力が誰にでも使えるわけではないし、俺も使えな

い。

なのに今、俺は確証はないが、かなりの可能性で超能力に近い能力を使用した。

もしかすると、白雪が言っていた「特別な金属」の影響なのかもしれない。

だが、それを確かめる術はない。

今白雪はSSRの合宿で恐山に行っているため、聞くことが出来ないのだ。

他に事情を知ってそんな人間を考えるが誰も思い浮かばず、俺は神殺しを鞘に収め、諦めて強襲科を去った。

部屋に戻る頃には夜になっていた。

キンジは今出かけているようで、家にはいなかった。

ソファに座り、テレビを見ながらぐうたら過ごしていると携帯に着信があった。

携帯を開くとメールが届いており、送り主を確認するが知らないアドレスだった。

本文にはこう書かれていた。

「クラスのアイドル、りこりんだよおー？

いきなりメールしてゴメンね？

どうしてアドレスを知ってるのかは聞かないでね？

金助君にこの間の事件の関係で話したいことがあるから、明日台場のクラブエステーラに来てね」

どうやら送り主は同じクラスの峰理子のようだ。

理子とはクラスである程度話した程度で、そこまでは仲良くない。

だが、彼女は探偵科のAランクで情報収集能力が普通の生徒のそれを大きく上回るらしい。

更に彼女は武偵殺し事件の調査をしている。

今はとにかく何でもいいから情報が欲しかったので、「分かった」

とだけ返信した。

## 第9話　理子の誘惑と待ち伏せ

翌日、俺は強襲科のノルマを速攻でこなして台場のクラブ・エステ  
ーラに来ていた。

中に入り、理子を探していると奥の方から理子が駆け寄って来た。

「あ、キーくんMk?」

「・・・はい?」

「あの・・・理子さん今なんて?」

「ん?どうしたのMk?」

「俺はガンムか!」

「まあまあ細かいことは気にしない」

そう言っつて理子は俺を個室に引きずりこんだ。

「で、何が分かったんだ?」

ソファに座りながら問う。

「可能性事件、って知ってる? 事故ってことになってるけど、実  
際は武偵殺しの仕業で隠蔽工作されて分からなくなってるだけかも  
しれないヤツ」

「それはもしかして、浦賀沖海難事故のことかな?」

理子は俺の発言に目を丸くした。

「・・・どうして分かったの?」

「あのデータを調べたら明らかに隠蔽工作がされていたからな」

更に目を丸くした理子は、小声で

「Il n'y a pas insouciance (油断なら  
ないわね)」

とフランス語でつぶやいた。

対して俺は

「Que . . . est - ce que c'est? (何がだ?)」

と”フランス語”で答えた。

「な・・・何でフランス語が話せるの・・・?」

理子は俺がフランス語をしゃべったことに驚きを隠せない様子。

「デルタフォースの兵士は、他の国の部隊と作戦を合わせる時にスムーズにコミュニケーションをとるためと、演習の時に一般の兵士に作戦を知られないために色々な言葉を話すのさ。」

ちなみに俺は6か7カ国語くらい喋れる」

口を開いたまま理子が固まったので、俺は席を立った。

「情報がそれだけなら俺は帰らせて貰うよ。今日は予定が詰まっているんでね」

そう言っただち去ろうとした時

「ま、待って!!」

後ろから理子が抱きついてきた。

「・・・まだ何かあるのか?」

俺が振りかえると、身長差のせいで上目使いで理子が小さい声でこう言った。

「せっかく高つかい個室とったんだし、理子と”いいこと”しよ?」

理子は俺をソファに座らせ、押し倒そうと寄りかかって体重をかけてくる。

「この部屋の事は誰にもバレないよ? だから、理子と一緒に・・・しよ?」

理子は俺の耳の側で語りかけてくる。

それに対して俺は・・・

「悪いが断る。俺はそういうのには興味はないし、それに理子。君にはその気はないのだろう?」

予定が詰まっているから俺はこれで」

驚き以外の感情がないというほど顔を強張らせた理子を放置し、俺は部屋に戻った。

「アンベリール号の調査に向かった潜水艦が、何者かによる攻撃を受けて動けなくなった」

部屋に帰って来た俺に、海底調査の結果が言い渡された。

「・・・現在その潜水艦はどうなっているのですか？」

「スクリューを少し破壊されて移動が出来ない状態だ。現在も状態は変わらない」

「そうですか、ありがとうございます。では俺はこれで」

「・・・無茶だけはするなよ？金助」

回線を切る直前に、「名前」で金正が忠告した。

俺は、通信を終えた後直ぐにバイクを浦賀に向けて走らせた。

嫌な予感がする・・・！

バイクの速度計は、時速140キロを超えていた。

アンベリール号が沈没したところに一番近い港に着くと、そこには10人ほどの黒装束の武装した集団が固まっていた。

「来たか・・・」

黒装束の一人である男が、一步前に出てしゃべりかけてきた。

「待ち伏せかよ・・・潜水艦を攻撃して注目をひいておびき寄せたのか・・・」

「ご名答。そういうわけで貴様には大人しくして貰おうか。「久美」ちゃんが待ってるよ？」

男が右手を上げると、他の黒装束が囲んできた。

「そうか・・・貴様らが久美を・・・」

俺は神殺しを抜刀した。

黒装束の奴らが武器を構えて一斉に跳びかかってくる。

俺はそれを、全て同時にはじき返した。

「お前ら、その名を口にして無事に帰れると思うなよ・・・！！」  
俺の髪は激しく逆立っていた。



第9話、理子の誘惑と待ち伏せ（後書き）

感想お待ちしてまーす

第10話〜12年前の悲劇と怒りのヒステリアモード〜（前書き）

指摘を受けたため、金助君の『』を普通のにしようと思います。

## 第10話 12年前の悲劇と怒りのヒステリアモード

12年前ー俺が4歳の時、毎日父による兵士になるための特訓を受けていて、時間が無かったのと、親が軍人で近寄りがたかったという理由で同年代の友達が全く居なかった。

その頃、俺は訓練が終わった後遊ぶ友達が居なくて一人で自主練ばかりしていた。

そんなある日、家のすぐ近くに日本人の家族が引越してきた。

その家族の名字は神祓。

構成は、父・母・兄・妹というもので、妹の方が俺と同年で、兄が2つ年上だった。

異国の地で日本人同士ということと、子供の年が同じということもあり、家同士すぐに仲良くなった。

神祓家の子供の名前は、兄が明久、妹が久美であった。

久美が引越してきて以来、俺の訓練が終わる時間に久美と明久が俺の家に来て、それからご飯の時間まで一緒に遊んでいた。

1か月が経った頃には俺たちはかなり仲良くなっていて、特に俺と久美はもはや双子のように仲良くなっていった。

そうこうして1年がたったある日、悲劇は起きた。

食事に招待されて神祓家に家族全員で向かうと、久美たちの両親が血にまみれて倒れていたのだ。

そしてその横に立っていたのが、血に濡れた真っ赤な刀身の刀を持って、気絶した久美を抱えた明久だった。

父が近づこうとすると、窓からナイフを持った黒装束の男が数人飛びこんできて襲いかかってきた為、父と母が応戦した。

「これは明久さんがやったんですか・・・？」

俺は明久に近づきながら問いかけた。

すると明久が冷めきった声でこう答えた。

「そうだ・・・だが、仕方が無い事だった」

「どんな理由があつても人を殺していい訳がない!!」  
明久の言葉にキレて、俺は全力で怒鳴りつける。

「久美を利用する為に『イ・ウーに連れていく』と言ったら止めようとしてきたんだ。俺は悪くない」

俺が怒鳴りつけても明久の冷たい口調は変わらず、それどころか久美を抱えたまま俺の横を素通りして立ち去ろうとした。

「待てっ!!」

そう叫んで俺明久の肩を掴んで止めようとした。

その瞬間、明久の表情が一変し、

「俺の邪魔をするな!!」

久美を床に置いて・・・俺を斬りつけた。

「ぐああああ!!」

5歳の俺に当然その斬撃をよけることが出来ず、薄れゆく意識の中、立ち去りながら明久がつぶやいた言葉を聞いた。

「貴様も連れて行こうと思つてたが、弱すぎるな。もう二度と会うことはあるまい」

それを聞いた直後に俺は意識を失った。

その後俺は久美の両親と共に敵を排除した父と母に病院に搬送された。

俺はなんとか一命を取り留めたが、傷が深かった久美の両親は医者  
の懸命な手術もかなわず無くなつてしまった。

その事件の後、俺はイ・ウーという組織を追い始めた。

「な・・・貴様の戦闘能力は大したこと無かつたはず・・・!!」  
最初に話しかけてきた集団のリーダーらしき男が、顔を歪めながら  
言った。

男の眼には、倒れた部下とその上に立つ髪を逆立たせ、鬼神のよう

な威圧感を纏った金助が映っていた。

「俺を怒らせるからこうなるんだよ」

一瞬で立ち尽くす男に肉薄し、何も持っていない右手で男の額に掌底を叩き込んで脳を揺さぶり、気絶させた。

「ーヒステリア・リベンジ。」

通常のヒステリア・ノルマーレのように性的興奮ではなく、怒りによって発現する俺にだけ現れたヒステリアモード。

通常のノルマーレは女を守るヒステリアモードだが、リベンジはその名の通り女を傷つけられた時に復讐をするヒステリアモードであるのだ。

このモードになると、某バトル漫画のキャラクターのように髪が逆立つのだ。

そしてそれと同時に、神殺しの能力による身体強化を併用していた。

「雑魚の癖に俺に挑んでくるなんてな。俺に挑むならもつと強いやつを連れてこい」

そう意識のない男に言い放って沖の方を向こうとした瞬間、背後から殺気を感じ、神殺しを抜きながら振り向く。

そこには、黒のズボンと赤いコートを着た男が真っ赤な日本刀の峰を肩に乗せて持って立っていた。

「久しぶりだな、金助」

そう俺に声をかけてきた男は「ー明久だった。」

「明久・・・!!」

溢れんばかりの殺気を抑え、神殺しを八相で構える。

「おいおい久々の再会なのに物騒だな。気楽にやろうぜ?」

そういう明久からは、鋭い者でなければ気づけないほどの抑え込められた殺気が放たれていた。

「ならまず殺気を抑えてから言っただな。説得力が無さ過ぎるぞ」  
何をしてくるか分からない相手なので、喋りながらも最大限に警戒する。

ヒステリアモードの目で、かすかな指の動きや呼吸ですらも警戒の

対象である。

「なんだ、バレてたのか。なら遠慮はいらないな」

そう言った直後、明久から物凄い殺気が溢れ出た。

常人なら腰を抜かすほどの、殺気が。

一触即発、そういう雰囲気の中で俺はどうしても聞きたい事を聞くことにした。

「・・・一つだけ聞かせる。久美にあの後何をした」

その質問に対して、明久は素っ気なくこう答えた。

「俺の妹なんだから何しても関係ないだろ？」

明久がそう答えた瞬間、俺は地面を蹴った。

数メートル程距離は離れていたが、一瞬で間合いを詰めて全力で袈裟切りを放つ。

明久は、それを顔色一つ変えずに赤い日本刀で防ぐ。

「12年前と比べると驚くほど力を付けたな。称賛に値するぞ」

罅迫り合いの最中、明久は余裕たっぷりな声でそう言った。

「それはどう・・・もっ!!」

強化された身体能力で赤い刀を押し切り、低く回転しながら軸足を刈り取るうとするが明久は片手のバツク転で回避し、身体の右下で刀の先端を下にして構えた。

俺もバツクステップで距離を取り、神殺しを左手に持ち替えて脇のホルスターからSOCOMを取り出し、片手で明久に3発撃った。

しかし明久は全て身体を逸らしてかわし、どこからかチャクラムを取り出して投擲してきた。

SOCOMで正確に射撃してチャクラムを撃ち落とした俺は、SOCOMをしまい、胸ポケットから遮光バイザーを取り出して装着、腰の後ろにつけていたスタングレネードを右手で持ってピンを抜き、明久の前に投げてから素早く距離を詰める為に走り出す。

明久は腕で顔を隠すーということはず、チャクラムをスタングレネードに投げて破壊した。

それを見てすぐに足を止め、神殺しを身体の外に寝かせて構える。

森羅蒼天流一ノ型、真空波。

ヒステリアモードの反射神経を使って放てば、どれほどの威力が出るのかは想像できない。

だが、隙のない明久にむやみやたらと突っ込むよりはマシンはずだ。力を溜めて、物凄い速度で回転を開始する。

遠心力を乗せた神殺しを右手の全神経を瞬間的にフル稼働させ、一気に肘から手首を捻って振り切る。

「森羅蒼天流一ノ型、真空波!!」

技の名を叫んだ瞬間、真空によって生まれた見えない斬撃が明久の腕に当たり、防刃服を斬り裂き明久の腕から鮮血が飛び散った。

「!?!」

明久は痛みに顔を歪ませながら、今何が起きたのかを理解しようとしている。

「この12年で俺は力を蓄え続けた。だが、お前はそれを怠った。

それがお前の敗因だ!」

右手に握るSOCOMの銃口を明久に向ける。

その瞬間、明久は今いた場所から姿を消した。

そしてそのことに気付いた時には明久は俺の真後ろに居た。

明久が俺に向けて刀を振りおろした。

俺は気配を察知してすぐに横に跳んで避けた。

そして立ち上がりながら明久を見た俺は、言葉を失った。

俺が驚いたのは、明久の外観。

明らかにさつきには無かったものがある。

明久の身体がドス黒い光を覆っていた。

第10話〜12年前の悲劇と怒りのヒステリアモード〜（後書き）

金助君が遂にヒスりましたね〜



## 第11話 決着と代替着陸

明久がいきなりドス黒い光を纏ったことに警戒し、俺は神殺しを八相で構える。

明久は赤い日本刀を片手で体の右側に構え、その構えのまま爆発的な速度で接近してきた。

狙いは明らかに突きだ。

明久は体の捻りを開放して鋭い突きを繰り出してくる。

俺も神殺しを右手に持ち、右足で思いつき踏み込んで刀を疾風の如く突き出した。

「森羅蒼天流二ノ型、疾風突き！！」

突きがお互いに当たる！

という瞬間、突然何者かが俺達の間割って入り、両方の刀を掴んで止めた。

驚きながらも俺達の刀を止めた奴を見ると、ピッタリ張り付く黒いレザースーツで全身を覆い、顔にはヘルメットをかぶっていて顔は確認できない。

胸に膨らみがあるところを見ると女だということが分かった。

「悪いけどここまでよ。引き上げるわよ、明久」

若干低めの声で謎の女が明久の方を見て言う。

「どうやらこの女は明久の仲間らしい。」

明久がそう言われると、纏っていた黒い光が消えた。

「もう時間か・・・」

そう言いながら明久は俺を睨みつける。

「そもそもこの目的は時間稼ぎでしょ？ 目的が達成されたんだから

さっさと行くわよ」

女はそう言って掴んでいた刀を離し、姿を消した。

「今回は邪魔が入ったが、次は会った時に今のままだったらお前は間違いなく死ぬ。それを覚えておけ」

そう俺に一瞥しながら言つて、明久も姿を消した。

「・・・・・・・・」

俺は未だに状況を理解できず、呆然と立ち尽くしていた。すると突然、携帯が小刻みに揺れ始めた。

我に返つた俺は、携帯を開いて耳に当てる。

「金助！！今どこにいる！？」

いきなり携帯からバカでかい声が聞こえる。

電話の相手は、クラスメイトで車輜科ロツの武藤剛気。

ランクはAで乗り物と名のつくものなら何でも運転できる乗り物オタクならしい。

「武藤か。今は浦賀だが、どうしたんだ？」

ヒステリアモードが続いていた為、落ち着いて状況を確認する。

しかし武藤から帰つて来た答えは予想外のものだった。

「アリアが乗つた飛行機がハイジャックされた！」

「ハイジャック・・・だと・・・！？」

アリアが飛行機に乗っていたことは一旦置いておこう。

だが、偶然アリアが乗つた飛行機がハイジャックされたとは考えにくい。

そう考えた瞬間、ヒステリアモードの頭が答えを導く。

このハイジャックは恐らくーいや、ほぼ100%『武偵殺し』の仕業だ。

『武偵殺し』の最初の犯行はバイクジャックで、次がカージャック。仮に浦賀沖海難事故が『武偵殺し』の仕業だとしよう。

すると、次の犯行がキンジのチャリジャックとここでいきなり乗り物が小さくなる。

次にバスジャック、そして、ハイジャック。

浦賀沖海難事故で金一さんは乗客を避難させて死んだと言われているが、俺の仮説が正しければ金一さんは、浦賀沖海難事故ーシージャックで『武偵殺し』と直接対峙して、殺された。

3回目の事件で『武偵殺し』は金一さんを倒した。

しかしその次でいきなり乗り物が小さくなり、また少しずつでかくなっていく。

恐らく武偵殺しは、3回目のハイジャックでアリアを・・・殺すつもりだ。

その考えにたどりついた瞬間、俺は止めてあったバイクにまたがって、いつでも出られるようにした。

「金助、お前とキンジ以外の奴は教室に全員集まっている。来れるか？」

キンジが居ないという事は、恐らくキンジもアリアと同じ飛行機に乗っているだろう。

「すぐに行く！全速力でとせば30分くらいで着くからそれまで待ってる！」

そう言っで電話を切り、フルスロットルで発車させた。

30分後、俺は武偵高の一般校区の前にバイクを止めて、2-A教室に入った。

中では武藤が何やら電話に怒鳴っている。

俺は武藤に近づいて声をかけた。

「武藤、状況はどうなっている？」

声をかけられてやっと俺に気づいたらしい武藤は、電話を俺に差し出しながらこう言った。

「飛行機に何故かキンジが乗っててな、ハイジャック犯を撃退したらしいんだが、その直後にミサイルで燃料系の門を兼ねているエンジン2機を破壊されて、盛大に燃料漏れをしている。

燃料の都合上、羽田しか着陸できる場所が他にないから羽田に向かわせようとしたんだが、防衛省のクソ共が羽田を封鎖しやがったんだ・・・！！」

こみ上げる怒りを必死に抑えながら武藤は状況を整理して説明してくれた。

俺は電話を受け取り、耳に当てる。

「キンジ、聞こえるか？俺だ」

「金助か。状況は今武藤が説明したとおりだ。まんまとしてやられたぜ」

落ち着いた口調でキンジが返事を返してくる。

口調から察するにどうやらヒステリアモードになっているみたいだ。「どうやってなったのかは聞かないでやるよ。それより今どこを飛んでいる？」

「今は東京湾をぐるぐる回っている。着陸できるところを探してるんだが、思いつかなくてな」

キンジはどうやら代替着陸の場所を探しているらしい。

「・・・ちよつと待ってる、キンジ。レキ、学園島の風速は分かるか？」

少し考えて、一筋の希望を見出した俺は、窓から先程降り始めた雨が降る外を見ているレキに話しかけた。

「ー私の体感では、5分前に南南東の風、風速4102mです」  
レキは淡々と答えを返してくる。

「じゃあ武藤、風速41mに向かって着陸すると滑走距離はどれくらいになる？」

次は横で俺とキンジの話を聞いていた武藤だ。

「・・・まあ2050つてところだ」

流星は乗り物オタク。こういう計算は速い。

ーそして条件はクリアされた。

「キンジ、今のお前なら俺が何を考えているのか解るはずだ」

俺は繋がったままの電話の向こうのキンジに考えを悟らせる。

「ああ。空き地島だな？」

そう答えるキンジの声は、希望が見えたからか、心なしかテンションが高くなっている。

俺の横で会話を聞いていた武藤が絶句する。

「正解だ。だがあそこには誘導灯すらない。どれだけのベテランパイロットだろうと誘導灯が無いと着陸はできない。それでもお前

「はやるか？」

俺はキンジを試す意味で問うた。

当然キンジは、

「当たり前だ。何としてでもやってみせる」

そうハッキリと答えた。

「良く言ったキンジ。幸運を祈っているぞ」

そう言つて俺は電話を切った。

振り向くと、教室内の同級生全員が俺に注目していた。

「皆、よく聞いてくれ。キンジ達が乗っている飛行機は、これから空き地島に着陸する。」

だがあそこには誘導灯がない。さて、どうする武藤？

俺は横で苦虫を噛んだような顔の武藤に話を振る。

「お前らは良くそんな事が思いつくな……。誘導灯が無いなら、作ればいい！」

皆！今から装備科アムドで懐中電灯をありったけ持つて、空き地島に行くぞ！！足は俺が確保する！！」

そう言つて武藤は俺の方を向く。

武藤を横目で軽く見て、皆に向き直る。

「この中にはバスジャックでキンジ達に助けてもらった奴らが大勢いる。」

その恩義に報いる時が来た。皆！絶対に飛行機を着陸させるぞ！

「！」

俺の声を合図に、2・A教室の生徒全員が雄たけびをあげながら装備科へとかけて行つた。

「金助！俺達は足を確保するぞ！！」

そう言つて武藤と俺は車両科のドッグへと向かった。

第11話 決着と代替着陸 (後書き)

次回、武偵殺し編完結です。

ちなみに武偵殺し編が終わったらオリジナルストーリーをやるつもり  
思っています。

ということで感想をお待ちしています

## 第12話 決死の着陸とアリアの告白

金助との電話を終え、キンジは時計をチラッと見た。

「燃料切れまで、後3分。」

機内放送用のマイクを取り、キンジはこう言った。

「皆様、当機はこれより緊急着陸を行います」

A M A 6 0 0 便は、東京湾のレインボーブリッジの手前の方を飛んでいた。

そろそろ人工島が見えてもいいはずだ。

キンジは、本来なら人工島がある場所を見た。

「ー」だが、人工島は見えない。

着陸は「ー」不可能だ。

元々分かってはいたが、ここまで見えないとは……。

金助が言ったように、どれだけベテランのパイロットであろうと惨事は免れないだろう。

……では、どう被害が少なくなるように墜落させるかだ。

そうキンジが考えた瞬間、

「キンジ。大丈夫。あんたになら出来る。出来なきゃいけないのよ」

横のアリアがキンジにそう言った。

「あんた、武偵をやめたいんでしょう？なら武偵のまま死んだら負けよ。」

それに「ー」あたしだって、まだ……ママを助けてない！

あたしたちは、まだ死ねないのよ！！」

アリアがさらに言葉を続ける。

そして前に向き直り

「こんなところで死ぬわけがないわ！！」

——と言いつ切ったその直後だった。  
何も見えなかつた暗い海に、突然小さな点でできた長方形の光が見えた。

長方形の右手前では、点どころでない、目を覆いたくなるほどの光が続けざまに起こっていた。

おかげでその周辺が鮮明に見える。

いきなりの出来事にキンジが焦っていたら、先程金助と通話した衛星電話に電話がかかって来た。

電話に出ると、

「キンジ！見えてるかバカ野郎！」

と親友の怒鳴り声が聞こえてきた。

「武藤！？」

キンジが驚いた声で「この光は何なんだ？」という意味を含めて声の主の名を呼ぶと、武藤は

「お前が死ぬと、白ゆ・・・いや、無く人がいるからよオ！オレ、車輛科で一番でかいモーターボートをパクツちまったんだぞ！」

半ばやけくそ気味な声で叫んだ。

それに続いて電話機から別の人物の声が聞こえてきた。

「キンジ！俺のスタングレネードの光見えてるか！？ 持つてる分全部持つてきて今回だけで使い果たしそうなんだぞこの野郎！早く着陸しやがれ！」

それに装備科の懐中電灯も無断で持つてきたんだ！後で全員分の反省文お前一人で書けよ！」

金助だ。

ということとは、あの強い光はあいつのスタングレネードのようだ。返答をする間もなく、更に次々と別の人物の声が聞こえた。

「キンジ！機体が見えてるぞ！」

「あと少しだ！」

「もう少し頑張りやがれ！」

——この声、こいつら俺とアリアと金助でバスジャックから助けた



奴らじゃないか！

同級生達の激励の言葉を受け、キンジの飛行機がスタングレナードが爆発している所に着いた。

武偵憲章1条。仲間を信じ、仲間を助けよ。

着地と同時に、アリアが残ったエンジンから逆噴射をかける。

「止まれ・止まれ止まれ止まれえーっ！！」

もう少しで吹っ飛びそうな衝撃の中アリアが叫ぶ。

そんな甲高いアニメ声に合わせて

「行くぞ！！」

キンジは地上滑走用のステアリングホイールを操作し、機体をカーブさせた。

武藤の言った通り、2050mでは止まり切らない。

それはキンジにも分かっていた。

だが、キンジはそのつもりで人工島に突っ込んでいた。

――見えてきた。

風力発電の、風車の柱が！

飛行機の右翼が柱にぶつかり、風車を折り曲げながら機体は柱を軸にぐるりと回る。

着地の時よりも激しい衝撃が飛行機に走った。

キンジとアリアは、操縦席でもみくちやに跳ねまわって――

「……止まった」

金助の横に居た武藤の口から安堵がこぼれる。

それを合図に、その場にいた全員が歓声を上げる。

俺も声をあげそうになりながらも、今は浮かれている場合ではないと判断し、気持ちを切り替えて皆に声をかけた。

「皆！今は乗客の救助が最優先だ！時間を無駄にするな！」

俺の声に触発された皆は、即座に飛行機にかけて行った。

そこは流石、仮にも武偵なだけはある。

そんなことを考えながら、俺は武藤と操縦席の真上に登って、小さいハッチを開けて中を覗き込む。

中では椅子に座るキンジに、アリアが抱きつくような姿勢で乗っかっていて、俺たちに気付いたキンジは苦笑いを浮かべながらも指を二本立ててピースしてきた。

その後、キンジとアリアは病院に運ばれた。

ー余談だが、俺は事件の報告書をキンジの代わりに纏めようとして、キンジの病室で書類に手を付けたのだが……

明久との戦いで神殺しの身体強化、今の肉体の限界を超えた真空波、そしてヒステリア・リベンジの長時間使用という無茶のダメーシが後から来てしまい、その場で倒れ、俺も同様に入院することとなってしまう。

数日経ち、俺とキンジとアリアは退院ー俺は一日遅れてーして部屋に戻っていた。

部屋に戻った直後、俺はアリアから予想外の告白を受けた。

「金助、あたしね……ロンドンに帰ることになったの……」

**第12話 決死の着陸とアリアの告白 (後書き)**

なんかパツとしない終わり方だったな・・・

てことで次回、武偵殺し編完結です。

感想、お待ちしています

第13話 終わり始まり (前書き)

時間の都合上、一日空けてしまいました・・・  
すいませんでした!!

### 第13話 終わり始まり

突然のアリアの告白に、俺は驚きを隠せなかった。

「あたし、やっぱりパートナー探しに行くわ。ホントはあんた達だつたら良かったんだけど、でも・・・約束だから」

約束、恐らく一件だけ事件と一緒に解決するっていう約束だろう。

「武偵憲章2条。」 依頼人との契約は絶対守れ”。 だからもう金助、あんたを追わない」

実際はアリアは俺よりキンジに熱心ーアリアにヒステリアモードを見られていないので当然と言えば当然だーだったから、追われた記憶がほとんどないのだが、

流石にそれを言うのは自重する。

「結局あんたの実力は分からなかったけど、あたし達がハイジャックされてた時にあんたはテロリスト集団を捕まえてたんでしょ？」  
アリアが言ってるのは、浦賀港での戦闘だ。

明久と謎の女は、部下であろう黒装束の集団を置いて消えたため、移動中のバイクで警察ー知り合いの信用できる刑事ーに通報して逮捕して貰ったのだ。

そのときにテロリストということにしたらしい。

「まあな。だが大したことじゃない」

実際に大したや相手じゃなかったもので、正直にアリアに返答した。大変だったのは明久との戦闘の方だ。

「そう？・・・まあそういう謙虚なところを含めて、あんたは一流の武偵よ」

「よせよ。俺は一流なんかじゃないさ」

アリアの言葉に、まんざらでもない顔で答える。

「私の中じゃ、あんたは一流よ。 思い返してみると、あんたと組んだのはバスジャックの時だけよね・・・」

あんたは実力を見せなかったけど、上手くあたしに合わせてくれて

たのは分かった。

だから・・・もし良かったら、もう一度会いに来て。その時は今度こそ、パートナーに・・・」

ベランダから星空を眺めながらそう言ってくるアリアは、なんだか無理しているように見えた。

「・・・考えとくよ。それよりロンドンにはいつ帰るんだ？」

アリアの頼みを軽くあしらって、俺は話題を変えた。

そんな俺の問いに対し、アリアは少しためらいながらも

「・・・今日よ。もうすぐにでもここを出て、女子寮の屋上にヘリがあるからそれに乗って、イギリス海軍の空母まで行って、そこから艦載ジェット機でぴよんよ」

・・・スケールがでかい。

流石は貴族様だな。

「そうか・・・名残惜しいが、これでお別れだな。短い間だったが、楽しかったぞ」

そう言いながら俺はアリアに右手を差し出す。

「あたしもよ。キンジも、ありがとうね・・・」

アリアは俺と握手をした後、俺の横に居たキンジに手を出した。

「あ、ああ」

キンジは歯切れの悪い返事をしながら握手をした。

「・・・それじゃああたし、もう行くね」

「見つかるといいな、パートナー」

少し穏やかな表情を作りながらキンジが言う。

「きっと見つかるわ。あんたのおかげで世界のどこにもいない訳じゃない事がわかったから」

「そうか、がんばれよ」

「達者でな」

俺とキンジが続げざまに言うと、アリアはドアを開けながら

「うん。バイバイ」

そう言っであっさり出て行った。

俺は振り向いて玄関を去ろうとしたが、キンジはその場に立ち尽くしていた。

理由は明白だ。

出て行つたはずの、アリアの足音が全く聞こえないのだ。

キンジはのぞき穴でドアの外を見ようとしていた。

「別に止めないが、見ない方が良いぞ」

そう言つて俺はリビングに戻つた。

俺がキンジにああ言つた理由、それはーアリアがドアの前で泣いていたからだ。

何故泣いているのかと言われれば、答えは当然キンジをパートナーに出来なかつたから、だ。

俺が帰つてくる前、キンジは俺とアリアがさつきしたのとあまり変わらない会話をしたらしい。

そこでキンジはアリアのもし良かったらパートナーとして会いに来て、という申し出を断っている。

結局キンジは、俺の警告を無視してのぞき穴で泣いているアリアを見てしまった。

アリアがこの部屋を出て行つてから30分が経つた。

キンジはこの30分間、ずっと頭を抱えて思いつめた表情をしていた。

俺はその横で呑気にコーヒーを飲んでいた。

すると、急にキンジが頭をあげて、俺を見て、こう言つた。

「なあ金助。俺は遠山の欠陥品、だよな？」

「そうだな」

俺はキンジの自虐的な発言を、否定ではなく肯定した。

欠陥品というのは、ヒステリアモードを上手く扱えないということだろう。

それは俺も同じだから、あえて肯定したのだ。

「でも、俺はあいつの味方ぐらいには、なれるかもしれない」

キンジの言葉には、一種の覚悟が含まれていた。

「それで、結局どうしたいんだ？」

キンジが何を言いたいのかは分かっている。

だが、俺はあえてキンジにそう問いかけた。

「アリアはずっと一人で戦ってきた。これからもそれは変わらないだろう。あいつは強い。だけど、やっぱりどこまで行っても独りなんだ」

自分に言い聞かせるように、キンジがそう言う。

「男なら言葉にするより行動をしる。早くしないと一生後悔することになるぞ？」

そう言っつて、コーヒーに口をつける。

「サンキュー金助。行ってくる！」

キンジはそう言い残し、部屋から出て行った。

どこへ？とは聞かない。

俺はカップの中のコーヒーを飲み干し、テーブルに置いてから椅子から立ち上がった。

そして、キッチンへ向かい、冷蔵庫の中身を見て今日の晩御飯を考える。

キンジはアリアを連れて帰ってくるだろう。

根拠はない。

だが、なんとなくそんな気がする。

ありったけの食材を使って、豪華な料理を作ろう。

今日は俺達パーティーの再結成日になるだろうから。



### 第13話〱終わり〱と始まり〱（後書き）

これで武偵殺し編、完結です！

今回はオリジナルストーリーをやるので、少し日を空けるかもしれ  
ませんので、ご了承ください。

ということで、感想お待ちしております。

## 現時点での主人公のプロフィール（前書き）

すいません、テストが近くなったため次話を考える時間が少な  
く遅れています。

てことで場つなぎです。

## 現時点での主人公のプロフィール

名前：毒島金助ぶすじまきんすけ

性別：男

身長：185cm

体重：74kg

誕生日：4月5日

血液型：O型

武器：神殺し（刀）・青龍円月刀・SOCOM×2・M4A1・軍支給のベレッタ・コンバットナイフ×2・スタングレネード

武偵ランク：強襲科Aアサルト・諜報科Sレザラ

容姿：少し短めのがった黒髪に、不知火に勝るとも劣らない整った容姿。

引き締まりつつもがっしりとした体だが、長身の為あまり目立たない。

アメリカの武偵高ではかなりモテた。

所属：米陸軍第1特殊部隊デルタ作戦分遣隊デルタフォース・東京武偵高強襲科

家族構成：父（金正）・母・息子（金助）

概要：遠山家（父）と毒島家（母）の間にアメリカで生まれ、幼少期から軍人の父に戦闘や潜入などの英才教育を受けていた。

5歳の頃に久美を明久に連れ去られたのをきっかけに、母から毒島家に伝わる森羅蒼天流の訓練を受け始める。

中学から武偵高付属中の諜報科に通い、インターンとして14歳のときにニューヨーク武偵高に入る。

そして14歳で特例としてデルタフォースに入隊、数々の潜入作戦を成功させて少佐の地位に登りついた。

初対面の人間には紳士的に接するが、少し仲のいい相手になると碎けた喋り方になる。

ハッキングもかなり得意で、インフォルマ情報科にスカウトされたこともある。  
容姿が良く、礼儀正しいためかなりモテる。  
料理がそこそこできる。

以上です。

## 現時点での主人公のプロフィール（後書き）

オリジナルストーリーはただ今執筆中です。

すぐに上げられるように頑張りますのでお待ちください。

## 第14話 謎の少女

「アリアの”H”ってホームズの”H”だったんだ」

帰ってくるなり「あたし、実はシャーロック・ホームズ4世だったのよ」的なことを言ってきたアリアに戸惑いながらも返事を返す。

「信じられないよな・・・こんなのがあのシャーロック・ホームズの曾孫だぜ？こんなちっちゃ「風穴」スミマセン何でもないです！」呆れた顔でアリアにとってのタブーを言おうとしたキンジに、アリアはキンジの方を見ないでガバメントを向けた。

キンジとアリアを見ていたら、なんだか眠くなってきたな。今日はもう寝るか。

「今日はなんか眠いから先に寝るぜ。お休み」

俺は二人に一言いれてから寝室のドアを開けた。

バタン！

閉めた。

——この部屋は元々4人部屋で、2段ベッドが二つあり、俺とキンジとアリアで場所を決めて使い分けている。

俺のベッドは左下、なのだが——その上に見覚えがある少女が、居た。

「いやいやそんなわけない落ちつけ金助きつとあれは幻覚だ俺のベッドに人が居るわけがないましてやアイツが居るわけがああああああ！」

「金助、何かあったのか？」

うろたえて頭を抱えている俺に、キンジが話しかけてきた。

「・・・キンジ。ちょっとこの中見てくれるか？」

俺がそう言つと、キンジはしぶしぶと寝室のドアを開けた。

バタン！

「どうしてこの部屋に女が居るんだ！おかしいだろ！」

そう言いながらキンジはドアを勢いよく閉め、頭を抱えて叫び出し

た。

「早まるな！まだあれが幻覚じゃないという可能性が消えたわけではない！！」

俺はキンジにそう言ってから寝室の扉を再度空けた。

「・・・さつきから何を・・・叫んでいる・・・の？」

目の前にアリアより少し大きいくらいの少女が立っていた。

「三十六計逃げるに如かず！！」

俺は少女に背を向け、寝室から出ようとした。

ーそれが意味を成さない行動だと分かっていたいながら。

「どうして・・・逃げようとする・・・の？」

少女がそう言った直後、体が金縛りにあったように動かなくなった。

「・・・どうしてお前がここに居る、クラン！？」

体が動かない状態で、真後ろの少女ークランに問いかける。

「・・・金助がここにいる・・・から」

「答えになってない！！」

クランの返答に全力でツツコミを入れるが、未だに身体は動かない。部屋の前ではキンジがこちらを見て固まっている。

「金助が私に何も言わないで日本に行っちゃったから・・・大佐に聞いた・・・の」

あれだけ口止めたのに喋ったのか父上は・・・！！

いや、そんなことより今は身の確保だ！

「クラン！とりあえず俺を開放してくれないか！？話はそれからだ！」

俺は身の安全のために、クランに訴えかける。

「・・・わかっ・・・た」

クランがそう言うと、金縛りにあったように動かなくなった体が自由になった。

「もう一度聞くが、何故日本に来た？」

クランの方に向き直り、さつきと同じ質問をする。

「・・・能力使ったからお腹すい・・・た」

クランは俺の質問を無視して寝室から出ていった。

「・・・お前も苦労してたんだな」

そう言っつて、さっきまで固まっていたキンジが同情の目で俺を見ていた。

「分かってくれるかキンジよ・・・」  
俺とキンジの絆が深まった瞬間だった。

「・・・で、こいつは誰なの金助？」

俺は今、手足を縛られアリアによる尋問を受けている。

ちなみに何故かキンジも俺の横で縛られて、気絶している。

ガバメント片手に尋問するアリアの後ろでは、冷蔵庫から出してきたであろう冷凍食品を食っている。

何だこの画・・・。

「別に縛られなくても話すつて・・・」

「いいから答えなさい！あんたとはどういう関係なのよ！」

俺がため息交じりでつぶやくと、アリアが少し怒った声で怒鳴ってきた。

「・・・なあ、ホントにアイツあいつ誰なんだ？金助」

すると目が覚めたらしいキンジが横からそう聞いてきた。

「話すから急かすなつて。」

・・・あいつ、クランと初めて会ったのは去年の今頃。俺がイギリスの特殊部隊のSASに交換勤務していた時の話だ・・・」



第14話 謎の少女 (後書き)

スイマセン、異常に遅れてしまいました・・・

次話をもつ少し早くするよつに頑張ります

## 第15話 依頼

「1年前、イギリス、SASの基地

俺は交換勤務で、SASの基地に来ていた。

「さすが世界一の特殊部隊と名高いSASですね。兵士一人ひとりの練度が高くて驚きました」

本部の応接室の窓から、様々な訓練をしているSASの隊員を見ながら俺は向かい側のソファに座る第22SAS連隊の総司令官に喋りかけた。

「フフ、ありがとう毒島大尉。だが私としては君の存在の方が驚くことだと思うがね。その年で大尉だなんて、他の兵士の反感は買わないのかね？」

いかにも温厚そうなSAS総司令官は、見在目通り柔らかい口調でそう聞いてきた。

「それについては大丈夫です、エドモンド司令。俺の事は基本同じ基地の者しか知りませんし、外に知られているのは『デルタに物凄く若い士官が居るらしい』程度の噂だけです。から問題ありません」俺は流れるような口調で、司令にそう答えた。

「流石毒島大佐の息子だな。情報工作はバッチリというわけか。

ところで大尉・・・いや、今はこう呼んだほうがいいな。毒島武偵、一つ頼みたいことがあるんだが」

司令は急に態度を改めてそう言ってきた。

「・・・なんでしょうか？司令」

俺も姿勢を正してそう聞き返す。

「実はついこの間、周りを巡回していたうちの兵士5人が何者かによつて大怪我を負わされた。

イギリス軍で調べたんだが、ほとんど手掛かりは掴めなかった。

分かったのは犯人が超能力者の可能性が非常に高いということだけだ。

そこで毒島武偵、諜報科Sランクの君に調べてもらえないだろうか？これはイギリス軍からの依頼ではなく、私個人としての依頼だ。嫌なら断ってくれても構わない」

そう言い、司令は頭を深く下げた。

自分より目上の人間に頭を下げさせたまま返答をするのはいけないので、司令に頭を上げるように促して、頭を上げたのを確認してからこう答えた。

「司令に頭下げられちゃ断れませんね。その依頼、受けさせてもらいます。ただし、報酬は要りません」

依頼の承諾を聞いて安堵の表情を浮かべていた司令だが、その後の言葉に顔を曇らせた。

「・・・理由を聞かせて貰おうか」

「司令には父が良くお世話になっていますから」

そう言い、返事を聞く前に立ち上がって、一礼してから俺はその場を後にした。

実は、俺は今回の事件との関連性が高い情報を持っていた。

だがあえて司令には話さなかった。

もしその情報を司令に教えれば、イギリス軍で精鋭部隊を編成して報復行動に出るだろう。

ーそして返り討ちにされて部隊は全滅、という結果になりかねない。

俺が持っている情報は、イギリスに世界中から強力な超能力の使い手が集まり、戦いが起きるかもしれないという物だった。

砂礫の魔女・パトラを始めとする世界最強レベルの魔女や超能力者が集まるのだから、軍の精鋭部隊程度、手も足も出ないだろう。

俺も、ヒステリアモードを使用しても勝利は覚束ないだろう。だがまるつきり手が無いというわけでもない。

エドモンド司令に頼まれたのは情報収集だが、俺はこの事件自体を

独りで片づけるつもりだった。

片を付けるために必要な武装を得るため、俺は父の知り合いが居る、ある教会に向かった。

毒島の三大刀剣の一つ、討魔剣を得るために。

## 第15話 依頼 (後書き)

テストの点数が芳しくなくて、ずっと勉強が忙しくて投稿が遅れて  
しまいスイマセンでした

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1430y/>

---

緋弾のエリア～神殺し伝説～

2011年12月25日00時48分発行